

東海地区国立大学新入生の進路意識に関する研究*

若林 満 和田 実¹⁾ 中村 雅彦²⁾
齋藤 和志¹⁾

I. 研究の目的と方法

1. 研究の目的

筆者らは、女子短大生の職業選択過程の構造について研究を重ねてきた(若林, 後藤, 鹿内, 1983, 1984, 1985; 鹿内, 後藤, 若林, 1982)。これらの研究結果から、職業社会化過程の最終段階にある大学教育過程での進路選択のメカニズムについて、いくつかの興味ある点が明らかとなった。これらの知見は図1に示したような

諸要因の相互関係として整理可能である(若林他, 1983, 1985)。本研究の目的は、図1のモデルを基に、男女大学生の進路選択過程をどのようにとらえていったらよいかを検討することである。筆者らは男子大学生の職業意識について近年研究を進めている(若林, 中村, 齋藤, 1986; 中村, 若林, 佐野, 1986)が、本研究はその出発点を構成する探索的研究であるといえる。

若林他(1983)の説明に従って、図1を検討してみよう。図1において、職業社会化過程は、大きく分けて3

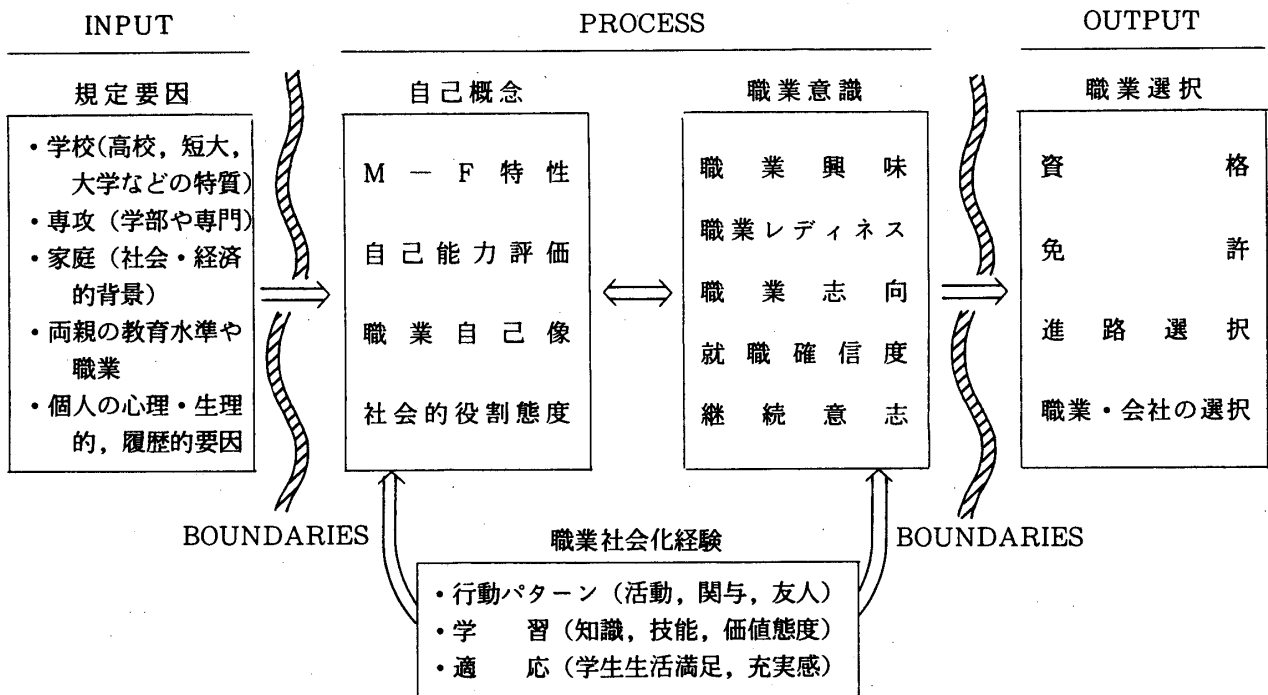


図1 職業社会化過程の構造(若林, 後藤, 鹿内, 1983より)

* 本研究のためのデータ処理は、名古屋大学大型計算機センターの FACOM M-382によって行われた。調査の実施にあたって協力していただいた愛知教育大学、岐阜大学、静岡大学、名古屋大学、三重大学の先生方に記して感謝の意を表します。

本論文の [I] 章は若林, [II] 章は中村, [III], [IV] 章は和田, [V] 章は齋藤によって分担執筆された。

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期)
2) 愛媛大学教養部講師

つの部分から構成されている。第1は職業社会化過程を外的に、マクロ的に規定している諸要因で、これらは過程の開始に当って各人がその中に持ち込んでくるもの、すなわち過程に対する INPUT 要因としてまとめられる。例えば社会化過程の場である学校（高校、短大、大学など）の種類や特徴、専門分野、家庭の状況、両親の教育水準や職業、個人の特性や生活史に関する情報などが、主要な外的規定要因となろう。他にもいろいろな規定要因が考えられようが、いずれにしる鹿内らの表現を借りれば、これらは職業社会化過程の「入口」となる境界 (boundary) を構成するものである (鹿内他, 1982)。この入口の境界条件の性格によって、職業社会化過程に参入してくる個人の特性と、職業社会化の環境の性質が大きく規定されてくる。

第2の領域は過程 (PROCESS) そのものである。この過程は職業社会化に係わる学校での諸経験をつうじて (諸経験の結果でもあり原因でもあるのだが)、進行していくものである。具体的には職業選択に係わる自己概念の確立と、それと相応的な職業意識の形成が、この過程の中味を構成している。いわゆる学校 (職業社会化機関) での経験は、自己概念と職業意識の結晶化に対して、ポジティブ・ネガティブ両方の影響を与える。また、学校経験の結果は、境界条件から期待されるものとは一致しない、諸結果を生み出すかもしれない。しかし、一般的にこの過程においては、前段階で形成された自己概念がより明確な形で確立される一方、職業興味、職業レディネス、職業志向といった職業意識の全体像が形成され、これら2つの間での適合関係がより強化されていくことが予想される。このような形で職業選択過程が進行し得る条件として、図1においては学校での職業社会化経験の質が重要であることが示されている。すなわち、学生生活をつうじ各人が一定の行動パターン (学生としての役割行動) を実行し、必要な技能・知識や価値態度を学習し、学生生活に適応していくことである。

第3は職業社会化の過程としての職業選択である。これは第1の「入口」に対し、「出口」(OUTPUT) としての条件を定めている。職業選択のタイプとしては、医師や看護婦に代表されるように、学校での職業社会化の過程が成功裏に終了すれば、資格・免許の取得が行なわれ、それと同時に就職が決定する「直線型」の場合もあれば、教員のように資格と実際の職業選択の間に大きな溝が存在する「破線型」の場合、民間企業や公務員志望のように、特定の資格や免許が関係しないかわりに、多様な選択の幅が与えられている「多線型」など、さまざまである。このような職業選択のタイプと、職業社会化過程、およびそれに先行する外的規定要因とはきわめ

て密接な関係があることはいうまでもない。仮説としては、職業社会化過程の専門性が高い程、自己概念と職業意識はより強固で明確なものとなることが予想される。

本研究の目的は、図1のモデルをもとに、男女大学生の進路選択に関わる諸要因の関連を明らかにすることにある。図のモデルにおいては、諸要因の関係は、大学生生活4年間を通じての進路選択過程に関連して展開することが示唆されているが、本研究においては特定の1時点、すなわち大学入学直後 (4月から5月の頃) に限定して調査が実施された。その理由は大学生生活の諸経験による変容が未だ生じない入学直後のフレッシュな時点において、新入生が自分自身や自己の将来の進路についてどのような意識・展望をもっているか、またそれらが外的要因 (INPUT 要因) によってどの程度規定されているかを明らかにするためであった。このように1時点での研究を積み重ねた上で、4年間の変化を分析し記述する縦断的研究がなされる必要がある。

2. 研究の方法

1) 被調査者と質問紙調査の状況

本調査の対象者は、東海地区の5つの国立大学 (静岡大学、愛知教育大学、名古屋大学、岐阜大学、三重大学) に1983年度に入学した新入生である。対象者の選択に当っては学部や専攻を限定せず、できるだけ多様な進路希望をもつ新入生を、できるだけ多数確保するという方針が採用された。そのため、各大学で教養課程の科目を担当している先生方をお願いし、上記の調査目的にそった対象者が得られるよう便宜をはかっていただいた。調査は授業時間の一部にこい込む形で、各教室で集団で実施された。若干の不良データを除き、回収された有効サンプルは、表1に示す通り男子1,312名、女子708名の合計2,020名であった。

表から明らかな通り、大学別・学部別・男女別の分布には大きな偏りが見られる。大学別では名古屋大学が最も多く、最小の静岡大学の約5倍となっている。学部別では、教育学部が877名と最大で工学部が約その半分、残りは人文・農・法の各々が100人台で続いている。水産学部は16名と少なく代表性に問題が残ろう。次に男女別では法・経・理・工・水産・医の各々が20名以下と少ない。逆に、教育では女子が538名と全女子の約76%を占め、女子サンプルの中で教育学部が過剰に代表されている点は注意を要する。このような女子サンプルの過剰代表性は特に愛知教育大学において顕著となっている。また大学と学部の組み合わせで見た場合、分布の不均等が目につく。具体的には静岡大学では教育と人文の2学部のみ、愛知教育大学では教育のみ、岐阜大学では教育・

表1 被調査者の内訳 (有効サンプル数)

大学 学部	名古屋大学			静岡大学			愛知教育大学			岐阜大学			三重大学			全 体		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
教育	25	35	60	54	69	123	132	240	372	118	158	276	10	36	46	339	538	877
人文				37	13	50							59	29	88	96	42	138
文	15	39	54													15	39	54
法	93	10	103													93	10	103
経済	86	13	99													86	13	99
理	92	14	106													92	14	106
農	45	10	55						46	20	66	20	6	26	111	36	147	
工	324	5	329						28	0	28	64	0	64	416	5	421	
水産												13	3	16	13	3	16	
医	31	2	33									20	6	26	51	8	59	
計	711	128	839	91	82	173	132	240	370	192	178	370	186	80	266	1312	708	2020

農・工の3学部, 三重大学では教育・人文・農・工・水産・医と6学部からサンプルが得られている。名古屋大学の学部構成がもっとも多様であるが, 人文と水産の2学部は学部自体が存在していないため0となっている。

まとめとして, 大学ごとの比較をする場合, 名古屋大学はほぼ全学部をカバーするサンプル構成となっているが, 静岡大学は教育・人文学部のみ, 愛知教育大学は教育学部のみ, 岐阜大学は教育・農・工のみと代表性に偏りがあり, 同じ条件での比較となっていない点に注意する必要がある。同様に, 学部間の比較の場合も, 問題があり, 教育学部は5大学すべてを含んでいるが, 文・法・経・理は名古屋大学のみ, 水産是三重大学のみ, 医は名古屋大学と三重大学のみという分布の偏りがみられる。以上みてきたように調査対象者の分布は不均等であるが, 本分析では探索的研究という意味から, 表1のサンプルに基づき大学別・学部別の比較を行っていく。したがって結果の解釈においては, 上に述べたような分布の偏りが十分考慮されなければならない。

2) 質問紙の構成

質問項目は図1の職業社会化過程のモデル(若林他, 1983)にあわせて, ①外的規定要因(父親の職業のような職業社会化過程に対する INPUT 要因), ②内的規定要因(職業興味や自己概念のような心理的 PROCESS 要因), ③希望職業や現実の職業選択のような OUTPUT 要因の3つに大別される。以下この分類に従って, 調査項目の概要を説明する。詳しくは Appendix を参照されたい。

(1) 外的規定要因

質問紙ではフェース・シートの形で①年令, ②性別, ③下宿・自宅, ④入学大学の志望順位(第1から第4志望まで), ⑤入学学部の志望順位(第1から第4志望まで), ⑥現役か浪人か, ⑦共通一次試験の得点, ⑧父の学歴, ⑨母の学歴, ⑩父の職業, ⑪家庭の社会経済的地位(「上の上」から「中流以下」まで7段階)が調べられた。以上は, 若林他(1983)において用いられたものを参考としている。

(2) 内的規定要因

①自己能力評価: 自己概念の一測度として, 22項目の「自己の能力や適性」評価に関する質問が提示された。回答者は, それぞれの項目(能力)が自分にどれだけそなわっているかを, 「非常にそなわっている」から「非常に欠けている」まで, 7点法で評価することを求められた。若林他(1983)の分析によると, これらの項目は「有能性」「協調性」「確実性」という3つの職務能力に分類可能である(Appendix A 参照のこと)。

②自己イメージ: この尺度は鹿内他(1982)によって開発されたもので, 男性性(M得点)と女性性(F得点)の2側面から, 自己像を評価するものである。被調査者は, 上記2側面に対応する形容詞に対し, それが自分にどの程度あてはまるかを, 「非常にあてはまる」から「非常にあてはまらない」の7点法で評定することを求められた。各側面に対応する形容詞については Appendix Bを参照されたい。

③職業レディネス: Super や Crites らの職業的成熟(vocational maturity)の概念に基づき, 若林他

(1983)が作成したもの。合計で18項目からなり、それぞれの項目は職業興味の限定性、職業選択への関心、現実的な職業選択態度、主体的職業選択の4つの下位概念を記述するものである。尺度構成に当っては、全18項目が合計され、単一の職業レディネス尺度がつけられる。項目内容については Appendix C 参照のこと。

④職業興味：この尺度は、Holland (1970, 1973)の職業興味目録 (Vocational Preference Inventory ; VPI) を参考に、本調査のために独自に作成された。

Holland (1973) は Super や Ginzberg らの職業発達理論が職業選択過程を記述するだけで、あまりにも一般的であり、誰がどのような職業につくかを予測したり説明する能力を持っていない点を批判した。そして、職業選択過程は個人の職業興味のある特徴的なパターンと、各職業がもつ独特な職業特性とが、相互の一致を見出す過程であるとする、彼独自の職業選択理論を明らかにした。Holland の理論では個人の職業興味は、現実的 (Realistic)、探究的 (Investigative)、芸術的 (Artistic)、社会的 (Social)、企業的 (Enterprising)、慣習的 (Conventional) の6つの類型から記述された。これら職業興味類型の機能は次の3つの仮説から説明される。第1は整合性 (consistency) の仮説であり、類型間にはある一定の類縁関係が存在するという主張である。例えば、現実的と探究的は相互に類縁的であるが、現実的と芸術的はむしろ相対する類型であると考えられる。ちなみに上述の類型記述の順序は、整合性の高いものが相互に隣り合うよう並べられている。第2の仮説は分化 (differentiation) に関するもので、個人はすべての類型に同程度の興味を示すのではなく、特定のどれか一つの類型に特に高い興味を示すようになるという。第3は適合性 (congruency) の仮説である。この仮説のもとでは職業的環境の特性も、個人の職業興味とまったく同一の形で整合性や分化を有しているものと仮定され、職業選択とは個人の職業興味の類型パターンと職業特性の類型パターンとの間に、一致が見い出されていく過程であると考えられている。Holland はこの適合過程としての各人の職業選択を予測する手段として、独自の職業興味目録を作成している。

本研究においては、Holland の R-I-A-S-E-C の6つの職業興味類型に対応する形で、具体的職業名が35項目提示され、それぞれに対し「非常に興味がある」から「まったく興味がない」まで、5点法で回答することが求められた。詳しくは Appendix D を参照されたい。

⑤職業志向：一般的には Job Orientation (職業や仕事に何を求めるか) とよばれるもので、本研究では

若林他 (1983) にならって、就職や職業選択において学生たちが志向すると思われる30項目の要因が選ばれ、将来つきたいと望んでいる職業において、各要因がどの程度そなわっていて欲しいかが、5点法 (「普通以下でよい」から「非常にたくさんあってほしい」) で問われた。若林他 (1983) では、これらの要因は「職務挑戦」と「人間関係」「労働条件」の3因子に分離できることが明らかにされている。なお、詳しい項目内容については Appendix E を参照されたい。

⑥入学学部に対するイメージ：先の②の自己イメージとまったく同じ項目内容で、「自分の所属する学部の学生一般」に対し、どのようなイメージをもっているかが問われた。回答は②の場合と同じく M 得点と F 得点の2側面から、2つの尺度として構成された。

(3) 進路選択

調査対象者は大学新入生であり、職業選択の途についたばかりの学生である。したがって進路選択の測度として次の3項目が用意された。

①大学卒業後の進路：6つの大きな進路カテゴリー (先生、公務員、民間企業、自営業、大学院進学、その他) と、各カテゴリー内での具体的進路・職業 (各2~5項目) が提示され、その内から1つを選択することが求められた。②進路決定時期：①の進路に進むことをいつ頃から考えていたかが、「小学生の頃から」「中学生の頃から」「高校生の頃から」「大学入試がせまった頃から」「いつ頃かはっきりせず」の5件法で問われた。③続いて大学卒業後、①の進路に現に進んでいる確率 (主観的進路実現確率) はどの程度と思うかが、0%から100%の11段階尺度で問われた。④進路選択とは直接関連はないが、入学大学が自分が将来つきたいと希望する職業を保証してくれる場合、大学に対する満足度は高まるであろうという仮説から、7点尺度 (「とても満足」から「とても不満足」) で、自分の選んだ大学に対する満足度が問われた。

3) 分析の方法

データの分析に当っては、必要に応じて因子分析 (主因子法・バリマックス回転) が行われ、因子負荷量の高い項目を用いて合成尺度が作成された。以下の分析においては、まず (Ⅱ) として表1に示した大学および学部間で、主要項目においてどのような違いがあり、各大学、各学部がそれぞれどのように特徴づけられるかが検討される。続いて、(Ⅲ) として進路選択における外的要因と内的要因の関係を、外的要因の規定力という観点から分析していく。そして最後に (Ⅳ) として、進路選択と大学満足の間に関係が仮定されたような関係が存在するか否か

について、大学満足感の規定要因に関する分析が行われる。本稿を通じた全体としての分析目的は、研究の目的で述べた通り職業社会化過程の最終段階に介在する、INPUT → PROCESS → OUTPUT という諸要因の相互関連について検討し、モデルの問題点や今後の研究の焦点を明確化することに置かれている。

II. 大学および学部の特徴

1. 大学別にみた個人的背景要因の特徴

1) 分析目的

通学の様態、大学・学部の志望順位、現役－浪人の割合、父母の学歴、卒業後の進路、進路の決定時期などの

個人的背景要因について、大学別に比較検討を行い、各大学の特徴を把握することを目的とする。

2) 結果と考察

表2には、大学別にみた個人的背景要因の集計結果を掲げる。

①通学の様態：5つの大学の中で、自宅通学者がもっとも多いのは、愛知教育大学である(88.7%)。逆に、自宅通学者がもっとも少ないのは静岡大学となっている(33.5%)。愛知教育大学は、県内唯一の教員養成系単科大学である。したがって、地元の教職志望者は必然的にこの大学への進学を選択する可能性が高くなる。地元学生が集中することは、結果的に自宅通学者の占める割

表2 大学別にみた個人的背景要因の集計結果

		名古屋大学 (N=839)	静岡大学 (N=173)	愛知教育大学 (N=370)	岐阜大学 (N=370)	三重大学 (N=266)
通学	自宅	69.2	33.5	88.7	76.2	54.5
	自宅以外	30.8	66.5	11.3	23.8	45.5
大学の志望順位	1	67.8	68.2	77.7	66.2	42.5
	2	23.2	12.7	15.6	23.0	19.5
	3	7.0	6.9	4.6	5.4	13.5
	4	1.5	11.6	2.2	5.4	22.9
学部の志望順位	1	86.1	89.0	79.8	80.8	81.6
	2	11.4	6.9	14.0	14.9	12.0
	3	1.9	0.0	4.3	2.2	1.9
	4	0.6	3.5	1.3	2.2	3.8
現役率	現役	70.7	78.6	83.1	81.1	71.8
	一浪	27.2	19.1	15.1	17.3	22.9
	二浪以上	2.1	2.3	1.8	1.6	5.3
大卒	父親	34.6	30.1	27.2	25.9	27.1
	母親	13.0	9.8	10.2	13.5	12.0
卒業後の進路	教員	8.0	58.2	86.8	62.8	24.2
	公務員	14.0	14.2	2.1	9.1	17.3
	民間企業	31.3	10.0	5.2	13.1	30.6
	自営業	4.9	5.2	0.8	3.0	4.1
進路決定時	大学院進学	33.1	6.5	2.4	7.9	16.5
	その他	8.7	5.9	2.7	4.1	7.2
進路決定時	小学生の頃	4.3	17.3	24.7	12.2	8.3
	中学生の頃	15.9	23.7	26.3	25.7	17.3
	高校生の頃	44.1	30.6	31.2	35.7	43.2
進路決定時	大学入試の頃	9.7	12.1	9.7	9.2	12.0
	はっきりせず	23.7	13.3	7.3	16.2	18.8

NOTE：数値はすべて%を表す。

合を増大せしめるわけである。ただ、そのためには地理的条件と、それに伴う交通機関の条件が整っている必要がある。静岡大学は、県の中央部に位置しているが、静岡県は東西に長く、したがって県の東端、西端に居住する学生は長時間を要することになる。その結果、同じ地元出身者であっても自宅通学の困難な者の割合が増大するのではなかろうか。このことは、静岡大学教育学部における自宅通学者の割合が39.8%であることからもうなづけるのである。

②大学・学部の志望順位：入学した大学を第1志望であると回答した者の割合は、愛知教育大学においてもっとも高く(77.7%)、三重大学においてもっとも低くなっている(42.5%)。一方、学部の志望順位が1位であると回答した者の割合は、静岡大学において高く(89.0%)愛知教育大学において低くなっている(79.8%)。

教員養成系の単科大学としての愛知教育大学は、地元の教職志望者にとってはもっとも高い優先順位がおかれているものと考えられる。そのため大学および学部の志望においてともに高い優先順位が与えられたものと考えられる。これに対し三重大学は対照的である。すなわち、三重大学の入学者においては、学部の第1志望率は81.6%と高いが、大学自体の選択については、彼らは本意であったようである。特に、志望順位が4位と回答した学生が22.9%と他大学を圧倒している点が特徴として指摘できる。ここに、高校などの進路指導の力が働いているように思われる。いいかえれば、学力偏差値に基づく輪切りによって、本来の志望とは異なる大学を選択させられたケースが、三重大学の場合多かったのではないかと推察される。

③現役一浪人の比率：5つの大学の中で、現役合格者の占める比率がもっとも高いのは、愛知教育大学であり(83.1%)、現役の比率がもっとも低いのは名古屋大学であった(70.7%)。愛知教育大学は、女子学生の占める割合が高い(64.5%)。女子学生は、一般に浪人をすることを避け、確実に合格する可能性の高い大学を選ぶ傾向が強いため、これが現役比率を高めることに寄与している。一方、名古屋大学は旧帝大の1つということで、“難関校”の部類に入る。したがって、浪人をしてでも名古屋大をめざす学生が相対的に多くなるわけである。ただ、大学の志望順位との関連でいえば、名古屋大学は第2志望率がもっとも高くなっている(23.2%)。したがって、本来より難関と考えられている大学をめざしていた学生、特に浪人生が現実性を重視してランクを落して受験した、ともうけとれる結果である。このあたり、他の旧帝大系大学との比較資料があれば、もっとはっきりしたことが言えるであろう。

④父母の学歴：国立大学新入生の父親が大卒である割合は、名古屋大学においてもっとも高く(34.6%)、岐阜大学においてもっとも低くなっている(25.9%)。また、母親については、大きな差異はみられないが、岐阜大学の割合(13.5%)が静岡大学(9.8%)に比べ、やや高くなっている。NHK世論調査部(1984)によると、1982年夏の時点で中学生・高校生を子どもにもつ父母6,126人のうち、父親の大卒率は15%、母親のそれは3%であった。この結果と比較すると、今回調査を行った東海地方の5つの国立大学における父母の大卒率は全般に非常に高い。同世代の平均から比べると、彼らの親達は、きわめて高い学歴をもっているといえる。さらに、NHKの調査は、親の学歴が高くなるほど、自分の子どもにも高い学歴を望む傾向がはっきりと表われている。すなわち、大卒の父親の73%、同じく母親の82%は、子どもを大学まで進学させたいと回答しており、中卒の父親の22%、同じく母親の21%、と比べて3~4倍となっている。本調査の結果は、NHK調査の結果を、現に国立大学に入学した者について裏付けた形になっている。同時に、本調査の結果は、高学歴の親ほど、自分の子どもを“いい大学”に入学させようと考え、これを実現させていることをうかがわせるものとなっている。

⑤卒業後の進路：卒業後の進路を教員、公務員、民間企業、自営業、大学院進学、その他に分類してみると、まず教員については当然のことながら教員養成系単科大学である愛知教育大学がもっとも高い(86.8%)。逆に、教育学部はあるものの教員養成系学部ではない名古屋大学においてもっとも低くなっている(8.0%)。しかし、裏を返してみるならば、愛知教育大学に入学したばかりの学生であっても、約15%の者は教員を志望していないことになる。わが国における出生率の低下は、就学人口の減少を招き、そのことが結果的に教員数の削減となって表われつつある。新規採用の教員数が減少するということは、教員養成系の学部を卒業したからといって必ずしも教員になれる見込みがあるわけではないので、他の職業に就く学生の割合を増加させることにつながる。こうした社会状況の変化を反映して、今後ともますます教育学部の教員志望率は低下していくものと予想される。そして、この問題は全国の教員養成系学部共通の悩みともなっている。

公務員を志望する者の割合は、三重大学においてもっとも高くなっている(17.3%)。また、民間企業を志望する者の割合は、名古屋大学(31.3%)、三重大学(30.6%)において高い。そして、大学院進学を志望する者の割合は、名古屋大学(33.1%)が他大学を圧倒している。これは、名古屋大学における大学院の充実ぶりを示して

いると同時に、特に理科系の新入学生に就職の際に大学院を修了していることが有利に働くとの観測がすでに存在しているためと考えられる。その他の進路については、目立った特徴はみられなかった。

⑥進路の決定時期：いずれの大学においても、高校生の頃に決定したと回答した者の割合が30～40%と多いことが共通している。ただ、愛知教育大学の学生で小学生の頃に決定したと回答した者が多くなっている(24.7%)ことは注目に値する。これを学部別にみてみよう。大学を通して教育学部と医学部に入学した者は、小学校時代に進路を決定したと回答した割合が、それぞれ19.8%、20.3%であった。他の学部の割合が、おおむね2～6%であるから、教育学部生と医学部生の早期進路決定傾向は強いといえよう。親にとっても、子どもにとっても、教員、医師といった専門的職業は憧れの的である。特に医学部の学生の場合、親もまた医師であるケースが多く、子どもに自分の職業を継がせたいと考える傾向は強いといえる。その結果、教員、医師といった職業に対する子どものコミットメントは、幼小期から形成される割合が高くなるものと思われる。

2. 学部別にみた自己概念の特徴

1) 分析目的

若林・後藤・鹿内(1983)によれば、自己概念は職業社会化過程において重要な位置を占める概念である。すなわち、青年期における自己概念は、社会化過程のある学校の種類や特徴、専攻領域、家庭の状況、両親の教育水準や職業、個人の特性および生活史などによって規定され、明確化されていく。こうして明確化された自己概念は、当該個人がどのような職業を選択するかを決定する礎となるのである。そこで、ここでは自己概念の主たる次元として、男性性-女性性(M-F)次元によっ

て捉えた性役割タイプと、職業的能力の自己評価次元を取り上げて、これらの自己概念の特性が、新入生の入学した学部の特徴といかなる関連性をもつかについて検討を行う。

2) 結果・考察

自己能力評価尺度と自己イメージ尺度について、それぞれ主因子法、バリマックス回転の因子分析を行った。得られた因子の内容を吟味してみると、それは若林他(1983)の結果とほぼ同一であった。そこで各尺度の項目の選定にあたって、若林らの研究知見と一貫性をもたせるために、先行研究と同一の項目を各因子を代表するものとして選んだ。自己能力評価は、“有能性”に関する項目8個、“協調性”に関する項目5個、“確実性”に関する項目6個からなっている(Appendix A 参照)。また、自己イメージは、“男性的成分”に関する特性項目9個、“女性的成分”に関する特性項目10個からなっている(Appendix B 参照)。

表3には、自己能力評価と自己イメージの因子ごとの合計点の平均値と標準偏差を学部別に示した。以下、この表に基づいて、各学部の新入生の自己概念の特徴をみていくことにする。

①自己能力評価：まず、自己能力評価のうちの“有能性”についてみてみよう。この能力は創造性、企画・計画力、説得・交渉力のような職務能力の高さを意味している。全般的にみて、人文学部生の有能性評価が高く、農学部生のそれが低いと言える。t検定の結果、人文学部の有能性得点と農学部、工学部のそれとの間には0.1%水準(両側検定)で有意差がみられた。また、人文学部と経済学部との間には1%水準で、人文学部・教育学部との間には5%水準で有意差がみられた。一方、農学部の有能性得点は教育学部、国文学部より0.1%水準で有意に低く、法学部、医学部とは1%水準、理学部、工学部で

表3 学部別にみた自己概念測度の平均の標準偏差

		教育 (N=877)	人文 (N=138)	文 (N=54)	法 (N=103)	経 (N=99)	理 (N=106)	農 (N=147)	工 (N=421)	水産 (N=16)	医 (N=59)
自己 能力 評価	有能性 (8項目)	31.06 (7.37)	32.55 (7.24)	29.70 (9.55)	31.24 (8.48)	29.96 (6.25)	30.92 (6.61)	28.65 (7.85)	30.23 (6.86)	31.25 (6.02)	32.02 (7.06)
	協調性 (5項目)	22.48 (4.47)	22.31 (4.04)	21.43 (5.44)	21.84 (5.03)	21.93 (4.16)	20.88 (4.25)	21.05 (4.99)	21.77 (4.46)	21.31 (5.57)	22.29 (4.65)
	確実性 (6項目)	25.88 (5.24)	26.36 (5.32)	25.26 (4.79)	25.46 (6.10)	26.85 (5.52)	24.76 (5.21)	24.81 (5.91)	25.72 (5.12)	25.25 (4.48)	27.83 (5.02)
自 イ メ ジ	M得点 (9項目)	35.08 (8.24)	35.79 (8.37)	32.54 (9.59)	35.28 (8.80)	34.43 (7.78)	34.27 (7.28)	33.54 (8.52)	34.62 (7.73)	35.81 (6.87)	36.98 (6.36)
	F得点 (10項目)	37.93 (6.90)	37.92 (7.29)	35.93 (7.08)	37.33 (7.30)	38.45 (7.24)	35.53 (5.68)	35.69 (6.97)	36.67 (6.46)	36.75 (6.78)	36.59 (8.46)

* ()内は標準偏差を示している。

* 得点が高いほど、その様な特性を強く持っていることを表す。

は5%水準で有意に低いことが見いだされた。以上の結果は、職務能力における有能性の自己評価は人文学部で高く、農学部で低いことを意味している。

つぎに、“協調性”についてみてみよう。協調性とは、共感能力、調和能力、明朗性など他者と和し良好な人間関係を維持していく能力を意味している。この側面については、教育学部、人文学部の学生の得点が他学部 비해、比較的高くなっている。すなわち、教育学部生は理学部、農学部、工学部の学生に比べ、0.1%水準で有意に協調性が高いことが明らかになった。また、人文学部生は、農学部生、工学部生に比べ5%水準で有意に協調性が高かった。

つぎに、“確実性”についてはどうであろうか。確実性とは、責任性、迅速性、細心性など確かで正確な仕事上の能力を意味している。全般的にみて、医学部の学生の得点が高く、理学部、農学部の学生のそれが低い傾向がみられる。すなわち、医学部と理学部、農学部との間には0.1%水準で、また医学部と教育学部、文学部、法学部、工学部との間は1%水準で有意差が見いだされた。理学部と経済学部、農学部と経済学部との間には1%水準で有意差がみられ、理学部と教育学部、人文学部、農学部と教育学部、人文学部との間には、5%水準で有意差がみられた。

以上の結果より、学部によって自己能力評価に特徴がみられることが明らかになった。評価側面ごとにとみると、有能性は人文学部生で高く、協調性は教育学部生で高い。そして、確実性は医学部生で高いことが明らかになった。また、農学部生は、いずれの評価側面においても低い自己能力評価を行っているのが特徴である。対人的交渉力、説得力、共感性などの社会的技能に文科系の学生が高い自己評価を行っていることはうなずける結果と言える。とりわけ、教育的職業を志望する学生にとって、共感性、対人葛藤処理能力、調和性などの技能は必須不可欠のものである。その意味において、教育学部には“然るべき資質”をもった学生が選抜されているように思われる。

一方、医学部の学生に確実性を高く評価している者が多いことは興味深い。医療というものが、細心の注意を払い、正確に、しかも手際よく行われなければならないことを考え合わせると、この結果は妥当なものといえよう。

農学部の学生は、上記の学部の学生に比べ、相対的に低い自己評価を行っていることがわかる。すなわち、尺度上のニュートラル・ポイントを基準に考えてみると、平均値がこれを下回っているのは有能性だけであって、他の2側面についてはニュートラル・ポイントをわずかに上回っている。もっとも有能性については、人文学部

と医学部以外はすべてニュートラル・ポイントを下回っているから、農学部だけが低いとはいえない。

なお、自己能力評価はあくまでも学生が自己認知したものに過ぎないことに留意しなくてはならない。したがって、彼らが実際にどの程度の“能力”をもっているかを問題とする場合には、行動観察、検査などに基づく客観的資料を得る必要がある。

②自己イメージ：男性性－女性性に関連する自己イメージについて、学部間の比較を試みてみよう。自己イメージ尺度の中の男性的成分、女性的成分の項目得点を合計したものを、以後それぞれM得点、F得点と呼ぶことにする。

まず、M得点についてみてみよう。あまり明確な特徴はみられないが、どちらかと言えば医学部生の得点が高く、文学部生、農学部生のそれが低い傾向があるように思われる。t検定の結果、医学部と理学部との間に1%水準、医学部と経済学部との間に5%水準で有意差がみられた。また、農学部と教育学部、人文学部、水産学部との間に5%水準で有意差が見いだされた。さらに、文学部と教育学部、人文学部、法学部との間に5%水準で有意差が見いだされた。

つぎに、F得点についてはどうであろうか。全般的にみて、教育学部、人文学部、経済学部のF得点が高い傾向にある。一方、理学部、農学部のF得点は低いといえる。t検定の結果、教育学部と理学部、農学部との間に0.1%水準、工学部との間に1%水準、文学部との間に5%水準で有意差が見いだされた。また、人文学部と理学部、農学部との間にそれぞれ1%水準で有意差がみられた。さらに、経済学部と理学部、農学部との間に1%水準で、工学部、文学部との間に5%水準で有意差が見いだされた。

鹿内・後藤・若林(1982)は、女子大生の性役割特性と社会的・職業的役割意識との関連性について検討を行っている。その結果、①M得点、F得点が共に高い学生ほど対人関係や人格陶冶を旨とする役割行動において積極的であり、大学生活への高い適応性を示している、②M得点が高い者は、M得点、F得点共に低い者に比べ、将来の職業生活において成功することを重視し、仕事の継続意志が強いことが明らかになった。この知見を本研究の結果と関連づけてみよう。本研究の結果は、農学部において、M得点、F得点が共に他学部 비해低いことを示している。このことは、農学部生の社会的・職業的役割意識の消極性を暗示しているのではないだろうか。既に述べたように、自己能力評価においても農学部生の評価得点が相対的に低いことが指摘されている。何故、農学部に入学生した学生の自己概念が相対的に低くなっている

のかについては、これだけの資料では結論づけられないが、否定的な自己概念が学生生活への不適応や消極的な役割意識につながるものであることは注意しておく必要がある。

3. 学部別にみた進路意識の特徴

1) 分析目的

職業レディネス、職業興味、職業志向性などの進路意識に関わる要因について、学部別に比較検討を行い、各学部の特徴を把握することを目的とする。

2) 結果と考察

表4には、学部別にみた職業レディネス、職業興味、職業志向性の平均値と標準偏差を示した。

①職業レディネス：主因子法、バリマックス回帰によって1因子が抽出された。この因子に高い負荷を与えている項目が職業レディネスを意味するものとして解釈された（Appendix C 参照）。

学部別に平均値の差を検定してみると、教育学部と医学部の職業レディネス得点が有意に高いことが見いだされた。すなわち、教育学部は水産学部を除くすべての学部との間に0.1%水準で有意差がみられた。また、医学部は水産学部との間に1%水準で、その他のすべての学部との間に0.1%水準で有意差がみられた。なお、医学部の得点は、教育学部に比べても有意に高かった。

その他の学部の組合わせでは、人文学部と農学部との間に1%水準で、文学部との間に5%水準で有意差がみられた。また法学部と農学部との間に、5%水準で有意差が見いだされた。

既にみたように、教育学部と医学部の学生は、きわめて早い時期に進路を決定している。このことが、職業レディネスの高さと密接に関連しているとみられる。一方、文学部や農学部の学生の職業レディネスは相対的に低い。これは、進路に不確定要素が多く、特定の職業に的を絞りにくいという学部の特徴を反映しているように思われる。最近になって、農学部の卒業生は、バイオ・テクノロジーをはじめとする先端科学関連の企業に就職する道も開かれてきたが、調査時点（1983年）ではまだ脚光を浴びるところまでいっていなかった。したがって、その時点で農学部に入学者は、どの進路を選んだらよいのかははっきりしない状態で入学してきた可能性が比較的高かったものと思われる。

②職業興味：主因子法、バリマックス回帰によって6因子が抽出された。第1因子は、“教育的職業興味”を反映する項目、第2因子は、“実際の職業興味”を反映する項目、第3因子は、“技術的職業興味”を反映する項目、第4因子は、“研究的職業興味”を反映する項目、第5因子は、“芸術的職業興味”を反映する項目、そして第6因子は、“指導的職業興味”を反映する項目から

表4 学部別にみた進路意識制度の平均値と標準偏差

		教育 (N=877)	人文 (N=138)	文 (N=54)	法 (N=103)	経 (N=99)	理 (N=106)	農 (N=147)	工 (N=421)	水産 (N=16)	医 (N=59)
職業 興味	職業レディネス (18項目)	53.58 (6.35)	51.85 (6.70)	49.84 (5.72)	51.32 (6.89)	50.63 (6.30)	50.55 (6.41)	49.69 (6.16)	50.66 (6.30)	51.32 (7.06)	56.47 (6.00)
	教育的職業興味 (10項目)	32.31 (7.29)	27.71 (8.46)	27.24 (7.67)	22.40 (8.19)	21.25 (7.16)	25.02 (7.21)	24.41 (8.00)	20.63 (7.02)	22.61 (7.86)	24.22 (8.46)
	実際の職業興味 (5項目)	10.43 (4.28)	14.02 (5.10)	9.87 (3.81)	14.83 (4.34)	16.54 (4.07)	10.75 (3.97)	9.74 (4.14)	10.13 (4.00)	9.31 (3.14)	10.41 (4.14)
	技術的職業興味 (5項目)	10.29 (4.74)	9.68 (4.18)	8.41 (4.13)	9.98 (4.76)	10.65 (4.87)	14.05 (4.29)	14.30 (4.89)	18.31 (3.78)	13.85 (5.45)	14.05 (4.93)
	研究的職業興味 (5項目)	12.10 (5.01)	11.79 (4.96)	10.89 (4.91)	10.94 (4.87)	10.36 (4.86)	15.46 (4.33)	15.29 (4.80)	13.82 (4.67)	16.19 (4.85)	14.17 (4.87)
	芸術的職業興味 (5項目)	12.42 (4.34)	12.31 (4.87)	13.56 (4.61)	12.40 (4.40)	10.81 (4.11)	11.73 (4.35)	10.61 (4.05)	11.36 (4.38)	11.12 (3.59)	11.24 (4.28)
	指導的職業興味 (5項目)	9.98 (3.61)	12.06 (4.60)	9.28 (3.30)	12.89 (4.09)	12.72 (3.84)	10.17 (3.41)	10.19 (3.84)	10.68 (3.48)	9.87 (4.10)	10.49 (3.93)
	人間関係志向 (14項目)	50.81 (10.49)	47.38 (10.43)	44.15 (9.94)	44.30 (10.67)	41.65 (9.94)	42.81 (9.92)	43.19 (10.74)	42.11 (9.96)	41.16 (8.96)	48.88 (12.13)
	職務挑戦志向 (9項目)	26.20 (6.31)	28.55 (6.28)	26.81 (6.77)	27.79 (6.53)	27.22 (6.62)	28.85 (6.43)	29.41 (7.32)	31.38 (6.23)	30.69 (4.57)	31.31 (6.73)
	労働条件志向 (5項目)	15.26 (4.55)	15.62 (4.54)	13.54 (4.62)	15.69 (4.66)	16.20 (4.66)	13.53 (3.79)	15.46 (4.74)	16.00 (4.43)	15.44 (3.22)	15.81 (4.39)

* ()内は標準偏差を示している。
* 得点が高いほど、その様な特性を強く持っていることを表す。

なっている (Appendix D 参照)

まず、教育的職業興味についてみてみよう。教育学部が唯一ニュートラル・ポイントを上回る得点を示している。すなわち、他のすべての学部と比べ、0.1%水準で有意に高い。ついで人文学部、文学部の順に得点が高くなっている。一方、工学部は、経済学部を除くすべての学部と比べ、少なくとも5%水準で有意に低いことが明らかになった。

つぎに、実際の職業興味については、経済学部が唯一ニュートラル・ポイントを上回る得点を示している。すなわち、他のすべての学部と比べ、少なくとも1%水準で有意に高いことが明らかになった。ついで法学部、人文学部の順に得点が高い。これに対し、水産学部、文学部の得点は相対的に低い。

つぎに、技術的職業興味については、工学部が唯一ニュートラル・ポイントを上回る得点を示している。すなわち、他のすべての学部と比べ、いずれも0.1%水準で有意に高い。また、その他の理科系学部 (理学部、農学部、水産学部、医学部) は、文科系学部と比べ、少なくとも1%水準で有意に高い得点を示していた。一方、文学部は、全学部の中で最低の得点を示している。

つぎに、研究的職業興味については、水産学部、理学部、農学部の得点がニュートラル・ポイントを上回っている。全般的にみて、理科系学部は、文科系学部と比べ少なくとも1%水準で有意に得点が高いことが見出された。ただ、工学部は理科系学部の中では得点が相対的に低いという特徴を示している。一方、経済学部は全学部の中で、最も得点が低くなっている。

つぎに、芸術的職業興味については、いずれの学部もニュートラル・ポイントを上回っていない。その中で、文学部の得点が相対的に高くなっている。すなわち、教育学部、人文学部、法学部を除くすべての学部と比べ、少なくとも5%水準で有意に高い。また、経済学部は他の文科系学部と比べ、少なくとも1%水準で有意に得点が低かった。そして、農学部の得点が全学部中最低になっている。

最後に、指導的職業興味については、いずれの学部もニュートラル・ポイントを上回っていない。その中で、法学部、経済学部、人文学部の得点が高くなっている。すなわち、これら3学部は他のすべての学部と比べ、少なくとも5%水準で有意に得点が高かった。一方、文学部は、全学部の中で最低得点を示している。

Holland (1973) の職業選択理論によれば、職業的環境およびそれに対応するパーソナリティとしての職業興味は大きく6種類に区別することができるという。各類型は、現実的類型 (realistic type)、研究的類型

(investigative type)、芸術的類型 (artistic type)、社会的類型 (social type)、企業的類型 (enterprising type)、慣習的類型 (conventional type) と呼ばれている。本研究において見出された職業興味因子を、Holland の類型と関連づけるならば、教育的職業興味は社会的類型に、実際の職業興味は企業的類型に、技術的職業興味は現実的類型に対応しており、研究のおよび芸術的職業興味は同一類型となっている。一方、本研究における指導的職業興味と Holland による慣習的類型に相応するものはない。

Holland はまた、ある職業的環境にはそれに対応し、しかも相互に類似したパーソナリティ類型の人々によって支配されるようになり、逆にあるパーソナリティ類型の人は、それに適合するような職業的環境を選択すると主張している。本研究の結果は、教育学部に教育的職業興味をもつ学生が多く、経済学部を実際の職業興味をもつ学生が多く、そして工学部に技術的職業興味をもつ学生が多いことを示しているが、これは学生の職業興味と学部の教育的環境が適合しているために他ならない。また、研究的職業興味については、理科系学部生において高くなっているが、項目内容を見ると、どちらかといえば自然科学系の職業的色彩の強いものであることから、当然の結果といえる。

なお、本研究の知見と関連するものとして森下 (1983) があげられる。森下は、Holland (1970) の開発した SDS (self directed search) の邦訳版を作成して、学生および在職者の職業行動を検討している。その中で、大学の専攻学部と学生の職業興味との関連性に関する知見は、本研究の結果とよく符合している。

③職業志向性：主因子法、バリマックス回転によって3因子が抽出された。第1因子は“人間関係志向性”第2因子は“職務挑戦志向性”第3因子は“労働条件志向性”に関する因子として解釈された (Appendix E参照)。この結果を、若林他 (1983) と比較してみると、第1因子と第2因子が入れ替わっているだけで、基本的には類似した内容の因子が抽出されている。また、若林、中村、斎藤 (1986) では、本研究における第1因子と第3因子が合わさった形で“安定志向性”因子が抽出されている。大別するならば、本研究における第1因子および第3因子は、外発的な報酬を求めようとする傾向を表わしており、第2因子は仕事そのものに価値を見出す意味において内発的報酬を求める傾向を表わしているといえよう。

それでは、学部別に職業志向の特徴についてみてみよう。まず、人間関係志向について教育学部がもっとも高く、ついで医学部、人文学部の順になっている。すなわち、教育学部は医学部を除くすべての学部との間に0.1

%水準で有意差が見出された。また、医学部は教育学部、人文学部を除くすべての学部との間に、少なくとも5%水準で有意差がみられた。そして、人文学部は文学部、医学部以外の学部との間に、少なくとも5%水準で有意差がみられた。一方、水産学部、経済学部はニュートラル・ポイントを下回る平均値を示している。

教育・医療活動というのは、他者との相互作用の上で成り立っている。生徒や患者の存在を抜きには考えられない職業ともいえる。したがって、これらの学部の学生に人間関係志向が高いのは納得のいく結果である。

つぎに、職務挑戦志向性についてはどうであろうか。全般的にみて、工学部、医学部において得点が高く、教育学部において得点が低くなっている。すなわち、工学部は水産学部、医学部以外のすべての学部との間に0.1%水準で有意差が見出された。また、医学部は農学部、工学部、水産学部以外の学部との間に、少なくとも5%水準で有意差がみられた。一方、教育学部は、文学部、経済学部以外の学部との間に、少なくとも5%水準で有意差が見出された。この場合、職務挑戦に含まれる項目が専門知識、技術の活用に関するものが多く、どちらかといえば、理科系学部に関連であった点が指摘できよう。若林他(1986)によれば、仕事や技術の専門性を重視する傾向は文科系よりも理科系の学生において高いが、仕事に挑戦しようとする構え自体には差がないことが明らかになっている。

最後に、労働条件志向性についてみてみよう。多くの学部においてニュートラル・ポイントを超える平均値が得られたが、文学部と理学部の得点が低いのが特徴である。すなわち、文学部は法学部、水産学部以外の学部との間に、少なくとも1%水準で有意差がみられた。また、理学部は人文学部、法学部、水産学部以外の学部との間に、0.1%水準で有意差を示していた。つまり、文学部、理学部の学生は給与、勤務条件などについてあまり多くを望まないことを示している。これは1つには、これらの学部では労働条件の比較的良好な大企業への就職が困難な状況を反映して、あまり高望みをしない学生が多くなっているためかもしれない。また、自分の興味・関心のある仕事に就くことができれば、それでよく、労働条件などは二の次とする傾向が文学部、理学部の学生に強いとみられることもできる。

Ⅲ. 進路意識を規定する

諸要因の関係について

分析目的

ここでは、国立大学新生の進路意識を規定する外的要因(規定因)、および内的要因(自己概念、職業意識)

卒業後の進路の希望(職業選択)との関連について検討する。

調査項目を繰り返すと以下のものからなっている(具体的な項目は Appendix を参照)。外的規定要因として、専攻や家庭の状況を問う項目、自己概念の尺度として、自己イメージ(男性性と女性性)と自己能力評価(有能性、協調性、確実性)を問う項目、職業意識尺度として、職業レディネス、職業興味(教育的、実際の、技術的、研究的、芸術的、指導的)、職業志向(人間関係、職務挑戦、労働条件)、職業選択として、卒業後の進路と卒業後の進路決定時期を問う項目からなっている。他に、学部学生一般のイメージ(男性性と女性性)、大学への満足度を問う項目が含まれている。

結果と考察

1. 外的規定要因と内的規定要因(自己概念、職業意識)との関係について

規定要因ごとに、自己概念と職業意識の平均値と標準偏差を示したのが表5である。ここでは、規定要因として以下の6つを取り上げて分析した。それは、通学様態(自宅かそれ以外か)、現役か浪人か、大学の志望順位(第1志望かそれ以外か)、学部の志望順位(第1志望かそれ以外か)、父親の職業(一般公務員、会社勤務、専門的職業、自営業、その他)、家庭状況(上流、中流、中流以下)である。

(1) 規定要因ごとにみた自己概念について

①通学様態：自己イメージの男性性においてのみ、自宅通学者より下宿者の方が高い($t(2018)=2.43$, $p<.05$)。これは、女性より男性の方が下宿している者が多いことによるものと思われる。②現役か浪人か：自己イメージの男性性、女性性ともに現役の者より浪人の方が得点が高い(それぞれ、 $t(2018)=3.21$, $p<.01$; $t(2018)=2.80$, $p<.01$)。また、現役の者よりも浪人の方が自己の能力評価の有能性を高いとみる($t(2018)=4.86$, $p<.01$)傾向が明らかとなった。③大学の志望順位：第1志望の大学に入った者の方がそうでなかった者より、自己イメージの女性性が低い($t(2018)=3.14$, $p<.01$)。また、第1志望の大学に入れなかった者の方が自己の能力評価の有能性を高いとみている($t(2018)=2.44$, $p<.05$)。このことは、「自分は、こんな大学に(第1志望で)入る学生より優秀なんだ。」という意識を示しているようで興味深い。④学部の志望順位：第1志望の学部に入った者の方がそうでなかった者より、自己イメージの女性性が低い($t(2018)=2.10$, $p<.05$)。⑤父親の職業：父親の仕事が一般公務員である者の自己イメージは、男性性、女性性ともに低く、逆

表5 規定因ごとくみた自己概念と職業意識(全体)

	自己概念				職業意識				職業志向						
	自己image		自己評価		レディネス	職業興味		関係	挑戦	条件					
	M	F	性	有能		協調	確実				教育	実際	技術	研究	芸術
通学様態	34.55 (8.12)	37.36 (6.85)	30.59 (7.26)	22.11 (4.51)	25.85 (5.34)	52.06 (6.59)	27.48 (8.87)	11.15 (4.59)	12.25 (5.61)	12.62 (5.12)	11.93 (4.38)	10.49 (3.73)	46.77 (11.00)	27.77 (6.69)	15.52 (4.50)
下宿	35.53 (8.26)	37.05 (7.07)	31.11 (7.54)	21.85 (4.62)	25.69 (5.31)	52.25 (6.54)	26.27 (9.01)	10.91 (4.62)	13.06 (5.53)	13.08 (4.90)	11.93 (4.46)	10.76 (4.00)	46.53 (11.24)	28.98 (6.78)	15.14 (4.60)
現OR浪人	34.51 (8.25)	37.02 (6.92)	30.30 (7.40)	21.96 (4.56)	25.78 (5.29)	51.85 (6.60)	27.40 (8.91)	11.09 (4.62)	12.38 (5.67)	12.71 (5.09)	11.80 (4.37)	10.38 (3.77)	46.86 (11.13)	27.90 (6.78)	15.51 (4.54)
浪人	35.89 (7.86)	38.04 (6.86)	32.17 (7.00)	22.25 (4.50)	25.87 (5.45)	52.93 (6.42)	26.19 (8.91)	11.05 (4.54)	12.87 (5.38)	12.93 (4.96)	12.33 (4.48)	11.17 (3.89)	46.17 (10.89)	28.91 (6.55)	15.07 (4.50)
大学志望	34.73 (7.98)	36.91 (6.74)	30.46 (7.06)	22.15 (4.53)	25.81 (5.15)	52.36 (6.54)	27.89 (9.03)	10.81 (4.53)	12.34 (5.65)	12.65 (5.11)	11.89 (4.41)	10.32 (3.67)	47.05 (11.24)	27.66 (6.69)	15.32 (4.46)
他	35.08 (8.54)	37.95 (7.20)	31.32 (7.85)	21.80 (4.58)	25.79 (5.67)	51.63 (6.63)	25.59 (8.52)	11.60 (4.70)	12.80 (5.49)	12.99 (4.96)	12.00 (4.39)	11.05 (4.05)	46.00 (10.72)	29.10 (6.72)	15.58 (4.67)
学部志望	34.82 (8.16)	37.12 (6.89)	30.72 (7.29)	22.10 (4.50)	25.79 (5.30)	52.37 (6.51)	27.04 (8.91)	10.96 (4.53)	12.49 (5.55)	12.79 (5.08)	11.97 (4.43)	10.47 (3.79)	46.57 (11.09)	28.03 (6.63)	15.23 (4.51)
他	34.98 (8.24)	38.02 (7.00)	30.95 (7.66)	21.68 (4.76)	25.87 (5.47)	50.84 (6.77)	27.46 (9.00)	11.67 (4.89)	12.57 (5.84)	12.64 (4.98)	11.75 (4.23)	11.07 (3.93)	47.29 (10.98)	28.75 (7.23)	16.30 (4.57)
父親	34.23 (8.71)	36.84 (6.73)	30.00 (7.33)	22.07 (4.43)	25.79 (5.55)	52.24 (6.64)	26.67 (8.87)	10.77 (5.17)	11.86 (5.73)	12.35 (5.14)	11.59 (4.28)	10.38 (3.96)	47.18 (11.15)	27.56 (7.22)	15.35 (4.71)
親	34.98 (7.97)	37.15 (6.96)	30.85 (7.22)	21.88 (4.71)	25.74 (5.28)	52.00 (6.36)	27.07 (8.92)	11.15 (4.58)	12.77 (5.51)	13.00 (4.96)	12.05 (4.40)	10.58 (3.73)	46.30 (10.89)	28.24 (6.59)	15.43 (4.46)
の	35.34 (8.27)	37.74 (6.90)	32.06 (7.75)	22.62 (4.31)	25.70 (5.17)	53.22 (6.85)	29.03 (9.00)	10.82 (4.22)	12.46 (5.53)	13.41 (5.34)	12.59 (4.76)	10.26 (3.98)	48.45 (11.69)	28.69 (6.88)	15.05 (4.49)
職業	34.81 (8.13)	37.57 (6.90)	30.68 (7.48)	22.05 (4.40)	25.91 (5.36)	51.92 (6.83)	26.91 (8.89)	11.23 (4.64)	12.45 (5.68)	12.41 (5.03)	11.75 (4.34)	10.75 (3.84)	46.44 (11.16)	28.26 (6.64)	15.45 (4.59)
業	37.56 (7.02)	40.47 (8.16)	32.32 (6.78)	23.21 (3.78)	27.47 (4.14)	51.53 (6.85)	27.16 (9.50)	11.74 (5.17)	13.16 (5.33)	12.42 (5.86)	11.89 (5.01)	11.89 (3.51)	48.47 (10.69)	27.79 (5.26)	17.00 (4.06)
家庭	39.28 (8.72)	39.11 (7.52)	33.58 (6.63)	22.14 (4.66)	27.10 (5.73)	53.25 (7.08)	25.49 (7.96)	11.35 (4.95)	12.46 (5.46)	13.07 (5.42)	11.60 (4.40)	11.52 (4.29)	47.12 (11.87)	28.96 (6.73)	15.35 (5.09)
状況	34.81 (7.95)	37.42 (6.82)	30.80 (7.23)	22.10 (4.43)	25.91 (5.17)	52.17 (6.46)	27.25 (8.91)	11.08 (4.58)	12.45 (5.60)	12.72 (5.01)	11.95 (4.41)	10.51 (3.76)	47.15 (12.10)	30.07 (6.06)	16.04 (4.55)
以下	33.05 (9.80)	34.34 (7.13)	28.70 (8.60)	21.06 (5.81)	23.68 (6.56)	50.87 (7.59)	26.04 (9.42)	10.88 (4.65)	13.22 (5.60)	13.18 (5.48)	11.78 (4.35)	10.86 (4.22)	46.64 (10.97)	28.01 (6.75)	15.38 (4.49)

に父親が専門的職業（医療、教育、弁護士など）についている者は、自己イメージの男性性、女性性ともに高くなっている。自己の能力評価については、父親が専門的職業についている者は、有能性がかなり高いとみている。⑥家庭状況：自分の家庭がより上流に属すると思っている者ほど、自己イメージの男性性、女性性ともに高くなっている。自己の能力評価については、自分の家庭がより上流に属すると思っている者ほど、有能性、確実性が高くなっている。

（２）外的規定要因ごとにみた職業意識について

①通学様態：下宿者より自宅通学者の方が教育的な職業に興味を持っている ($t(2018)=2.75, p<.01$)。これは、将来教師になりたい者が地元の大学の教育学部に通うためであろう。また、自宅通学者より下宿者の方が仕事に職務挑戦をより求めている ($t(2018)=3.65, p<.01$)。②現役か浪人か：現役の者より浪人の方が職業レディネスが高く ($t(2018)=3.12, p<.01$)、仕事に職務挑戦を求めている ($t(2018)=2.85, p<.01$)。また、現役の者の方が浪人より教育的な職業に興味を持っている ($t(2018)=2.58, p<.01$)。③大学の志望順位：第1志望の大学に入った者の方が、教育的な職業に興味を持っている ($t(2018)=5.40, p<.01$)。また、第1志望の大学に入った者の方が、仕事に人間関係をより求める ($t(2018)=1.97, p<.05$) が、逆に職務挑戦は第1志望の大学に入れなかった者の方がより求めている ($t(2018)=4.47, p<.01$)。④学部の志望順位：第1志望の学部に入った者の方が職業レディネスは高い ($t(2018)=3.77, p<.01$)。また、第1志望の学部に入れなかった者の方が、仕事に労働条件をより求めている ($t(2018)=3.82, p<.01$)。⑤父親の職業：父親が専門的職業についている者は、職業レディネスが高く、教育的な職業に興味を持ち、仕事に人間関係をより求めている。⑥家庭状況：自分の家庭がより上流に属すると思っている者ほど、職業レディネスが高く、指導的な職業に興味が高くなっている。また、自分の家庭は中流階級に属すると思っている者は、教育的な職業にかなり興味を持ち、仕事に職務挑戦を求めている。

これまでのことから、自己概念や職業意識は本人の要因だけでなく、父親の職業や家庭状況にもかなり影響されることが分かる。しかも、父親の職業や家庭の状況と一致する方向に影響を受けている。これは、父親の職業の継承という観点からいくと、中学生と高校生を被調査者として調べた小川・田中（1979）の結果と一致する。彼らは、次のような結果を見いだしている。父親の職業に対する息子の継承希望は、当該職に親が就いていない息子による当該職への希望に比べて、ほとんどの職業に

おいて有意に高い。なかでも、父親と同じ職業を子弟が選択する割合は、小・中学校教師、大学教師及び建築設計士においてかなり高くなっている（田中・小川，1985）。さらに、父親側からの職業の継承期待をみると、医者、教師、小売店主、土木・建築技師、公務員、町工場主において高い。出生順位では、非長男よりも長男でより期待されている。

小川らの結果と考え合わせると、子どもに対する父親の職業継承期待がかなり子どもの自己概念や職業意識に影響を与えていることが考えられる。

2. 進路意識の内的規定要因（自己概念、職業意識）相互の関係について

自己概念としての自己イメージ、自己能力評価、と職業意識としての職業レディネス、職業興味、職業志向の関係を示したのが表6である。

（１）自己概念の下位尺度間の関係

自己イメージの男性性が高い者ほど、また、女性性が高いほど、3つの自己能力は高く評価される傾向がある。なかでも男性性と自己の能力評価の有能性にかなり高い相関関係 ($r = .694$) がみられる。若林ら（1983）は、自己イメージの得点によって、男性特性、女性特性ともに高いMF型、一方の特性が高いMf型、mF型、ともに低いmf型とわけ、他の尺度との関連をみている。それによると、MF型が他のどの型よりも3つの自己能力評価が高くなっている。ここでの結果は、この若林らの結果を支持するものである。

（２）職業意識の下位尺度間の関係

①職業レディネスと職業興味：職業レディネスが高い者ほど、教育的な職業に興味を持っている。これは、教育的な職業に興味を持つ教育学部生が、職業レディネスが高いことによるものであろう。②職業レディネスと職業志向：職業レディネスが高い者ほど、仕事に人間関係、職務挑戦を求める。一方、職業レディネスが高い者ほど、仕事によりよい労働条件を求めない。つまり、職業レディネスの高い者は、仕事によりよい「労働条件」を求めるよりも、「やりがい」をより強く求めるということである。③職業興味と職業志向：教育的な職業に興味がある者ほど、仕事に人間関係を求める。技術的な職業、あるいは指導的、研究的な職業に興味を持つ者ほど、仕事に職務挑戦を求める傾向がある。

（３）自己概念と職業意識の関係

①自己イメージと職業レディネス：自己イメージとして、より男性性を持っていると思う者ほど、職業レディネスが高い。②自己イメージと職業興味：自己イメージとして、より男性性を持っていると思う者ほど、指導

表6 自己概念と職業意識の関係 (全体; N=2020)

		自己概念					レディネス	職業意識									
		自己image		自己評価				職業興味					職業志向				
		M性	F性	有能	協調	確実		教育	実際	技術	研究	芸術	指導	関係	挑戦	条件	
自己イメージ	M性																
	F性	.299 ***															
自己能力評価	有能	.694 ***	.338 ***														
	協調	.340 ***	.312 ***	.462 ***													
	確実	.396 ***	.353 ***	.378 ***	.390 ***												
職業レディネス		.377 ***	.111 ***	.379 ***	.278 ***	.302 ***											
職業興味	教育	.165 ***	.172 ***	.157 ***	.205 ***	.120 ***	.255 ***										
	実際	.052 *	.118 ***	.058 **	.049 *	.127 ***	-.058 **	.207 ***									
	技術	.047 *	-.034	.045 *	-.017	.038	-.095 ***	-.169 ***	.130 ***								
	研究	.020	-.047 *	.030	-.026	-.043	-.016	.134 ***	.072 **	.473 ***							
	芸術	.082 ***	.136 ***	.173 ***	.052 *	-.041	.010	.318 ***	.136 ***	.107 ***	.365 ***						
	指導	.245 ***	.170 ***	.234 ***	.095 ***	.077 ***	-.022	.243 ***	.592 ***	.234 ***	.196 ***	.289 ***					
職業志向	関係	.231 ***	.165 ***	.254 ***	.242 ***	.135 ***	.332 ***	.502 ***	.004	-.147 ***	.034	.163 ***	.134 ***				
	挑戦	.257 ***	.091 ***	.267 ***	.086 ***	.110 ***	.161 ***	-.077 ***	.018	.320 ***	.262 ***	.136 ***	.213 ***	.433 ***			
	条件	.022	.190 ***	.005	.031	.042	-.132 ***	-.061 **	.105 ***	.083 ***	-.055 *	-.075 **	.167 ***	.207 ***	.311 ***		

注) 有意水準: * p<.05, ** P<.01, *** p<.001

的な職業の興味度が高い。一方、自己イメージとして、より女性性を持っていると思う者ほど、実際の、芸術的な職業の興味度が高い。③自己イメージと職業志向: 自己イメージとして、より男性性を持っていると思う者ほど、仕事に職務挑戦、人間関係をより求める。一方、自己イメージとして、より女性性を持っていると思う者ほど、仕事によりよい労働条件を求める傾向がある。④自己能力評価と職業レディネス: 自分に有能性があると思っている者、協調性があると思っている者、確実性があると思っている者ほど、職業レディネスは高い。⑤自己能力評価と職業興味: 自己能力評価と職業興味には、

あまり高い相関関係が見られない。ただし、次の2つの事は言えよう。自分に有能性があると思っている者ほど、指導的な職業に興味を持っており、また、自分に協調性があると思っている者ほど、教育的な職業に興味を持っている。⑥自己能力評価と職業志向: 自分に有能性があると思っている者ほど、仕事で人間関係と職務挑戦を求める。また、自分に協調性があると思っている者ほど、仕事で人間関係を求める。自己の能力評価と仕事でよりよい労働条件を求めるのは、関連が見られなかった。

以上の結果をまとめると、自己イメージの男性性が高い者ほど、あるいは自己能力評価の高い者ほど、職業

表1 進路選択の心理的日ご概念と職業意識(主体; N=2020)

	自己概念			職業意識				レディス	職業意識					職業志向		
	自己image		自己評価	職業実践	技術研究	芸術	指導		関係	挑戦	条件					
	M性	F性										有能	協調		確実	
卒業後の進路	先生 (N=803)	35.68 (8.15)	37.93 (6.84)	31.35 (7.45)	22.55 (4.48)	25.90 (5.18)	54.08 (6.16)	32.97 (6.93)	10.50 (4.19)	10.40 (4.74)	12.07 (4.90)	12.20 (4.26)	10.08 (3.58)	51.19 (10.27)	25.99 (6.16)	15.31 (4.46)
	公務 (N=227)	32.71 (8.56)	36.99 (7.02)	28.40 (7.70)	21.80 (4.59)	25.79 (5.31)	49.96 (6.54)	25.67 (8.17)	13.67 (4.97)	11.98 (5.29)	12.02 (4.99)	10.87 (4.06)	11.58 (4.31)	43.83 (10.75)	27.08 (6.80)	16.30 (4.71)
	民間 (N=423)	34.20 (7.44)	36.64 (6.22)	30.49 (6.66)	21.60 (4.30)	25.86 (5.04)	49.59 (5.85)	21.67 (7.22)	11.44 (4.58)	14.47 (5.80)	12.28 (4.71)	11.67 (4.49)	10.92 (3.75)	41.94 (9.72)	29.00 (6.47)	15.93 (4.50)
	自営 (N=75)	35.85 (8.32)	36.87 (6.26)	31.23 (6.99)	21.13 (4.30)	24.65 (5.62)	52.69 (6.37)	23.24 (8.11)	12.24 (5.33)	11.43 (5.22)	12.65 (5.41)	12.97 (4.60)	11.51 (3.85)	44.10 (10.94)	28.20 (6.89)	14.33 (4.14)
	進学 (N=366)	34.66 (8.45)	36.04 (7.18)	31.18 (7.39)	21.62 (4.78)	25.64 (5.83)	51.81 (6.92)	23.11 (8.00)	10.23 (4.38)	15.39 (5.34)	15.17 (4.86)	11.88 (4.61)	10.51 (3.94)	44.43 (10.87)	31.89 (6.29)	14.82 (4.64)
進路の決定時期	他 (N=126)	35.58 (8.32)	36.22 (8.31)	30.56 (7.66)	22.22 (4.88)	26.13 (5.57)	52.46 (6.54)	24.43 (8.17)	10.65 (4.77)	12.42 (5.63)	13.17 (3.56)	12.52 (4.53)	10.34 (3.70)	47.23 (10.94)	30.00 (6.47)	14.95 (4.31)
	小学 (N=225)	36.36 (8.03)	37.98 (6.88)	32.19 (7.33)	22.88 (4.30)	26.60 (5.17)	56.12 (5.75)	31.49 (9.05)	10.73 (4.17)	10.95 (5.16)	12.76 (5.21)	12.47 (4.27)	10.07 (3.48)	52.33 (10.35)	28.04 (6.86)	15.43 (4.57)
	中学 (N=413)	36.25 (7.62)	37.44 (6.85)	32.14 (6.92)	22.73 (4.48)	26.35 (4.86)	54.88 (5.65)	30.17 (8.90)	10.71 (4.33)	12.11 (5.62)	12.74 (5.07)	11.98 (4.27)	10.52 (3.83)	48.88 (10.86)	27.69 (6.65)	14.70 (4.66)
	高校 (N=786)	35.35 (8.04)	37.35 (6.92)	31.19 (6.99)	22.14 (4.41)	26.04 (5.29)	52.57 (5.90)	25.84 (8.69)	10.88 (4.60)	12.97 (5.69)	12.86 (5.14)	11.70 (4.43)	10.52 (3.66)	45.97 (10.98)	28.68 (6.81)	15.25 (4.41)
	入前 (N=204)	33.69 (8.12)	37.98 (7.80)	29.29 (7.55)	21.29 (4.70)	25.76 (5.53)	50.14 (6.36)	25.95 (8.30)	11.90 (5.23)	12.77 (5.49)	12.34 (4.98)	11.77 (4.67)	11.16 (4.30)	45.68 (10.13)	28.34 (6.50)	16.13 (4.40)
進路実現確率	不明 (N=359)	31.18 (8.19)	36.01 (6.40)	28.03 (7.50)	20.76 (4.65)	24.26 (5.61)	46.73 (5.72)	24.45 (7.87)	11.65 (4.66)	12.92 (5.53)	12.97 (4.84)	12.10 (4.37)	10.70 (4.01)	42.96 (10.80)	27.57 (6.70)	16.09 (4.60)
	低 (N=596)	33.04 (7.95)	36.70 (6.83)	29.48 (7.15)	21.55 (6.03)	24.85 (5.43)	49.20 (6.47)	25.49 (8.05)	11.82 (4.79)	12.59 (5.37)	13.11 (4.99)	12.31 (4.59)	10.91 (3.86)	44.11 (10.74)	27.97 (6.70)	15.39 (4.69)
	中 (N=901)	34.78 (7.78)	37.26 (6.60)	30.57 (6.96)	21.93 (4.41)	25.93 (5.18)	52.30 (5.91)	27.31 (8.95)	11.03 (4.48)	12.58 (5.65)	12.78 (4.94)	11.80 (4.30)	10.43 (3.71)	46.40 (10.70)	27.95 (6.61)	15.24 (4.31)
高 (N=490)	37.01 (8.55)	37.97 (7.57)	32.64 (7.74)	22.78 (4.75)	26.77 (5.26)	55.50 (6.13)	28.99 (9.52)	10.28 (4.43)	12.35 (5.77)	12.37 (5.28)	11.69 (4.37)	10.40 (3.91)	50.56 (11.14)	28.82 (6.98)	15.73 (4.75)	

各々の合計数が総数に一致しないのは、記入もれがあることを意味する。

レディネスが高く、仕事に人間関係と職務挑戦をより求める傾向が見出された。また、自己イメージの女性性が高い者ほど、仕事に労働条件をより求める。このように、自己概念と職業意識（職業興味を除く）は明確に関連しており、若林らの一連の研究（1983, 1984, 1985）の結果を支持するものであるといえよう。

3. 自己概念、職業意識と進路選択との関係について

進路選択として、卒業後の進路（職業名）、進路決定時期、主観的進路実現確率を取り上げた。進路選択の低位尺度ごとに、自己概念と職業意識の平均値と標準偏差を示したのが表7である。

(1) 進路選択と自己概念の関係

①卒業後の進路：他の職業に比べて、先生や自営業につくことを希望している者は、自己イメージの男性性が高い。また、先生になろうとする者は自己イメージの女性性、3つの自己の能力評価がともに高い。②進路決定時期：小学生の時に将来の進路を決めている者は、自己イメージの男性性、女性性、3つの自己の能力評価がすべて高い。また、大学入試の直前に将来の進路を決めた者は、自己イメージの男性性は非常に低い、女性性は高い。③主観的進路実現確率：進路実現の主観的確率が高い者は、自己イメージの男性性、女性性、および3つの自己の能力評価がともに高い。

(2) 職業意識と進路選択の関係

①卒業後の進路：先生になることを希望している者は、職業レディネスが高く、仕事に人間関係を求めている。公務員か民間企業に就職することを希望している者は、職業レディネスが低い。また、公務員希望者は、仕事に労働条件をより強く求める。大学院に進学することを希望する者は、仕事に職務挑戦をより求める。②進路決定時期：かなり早い時期に将来の進路を決めている者は、職業レディネスが高く、仕事に人間関係を求めている傾向が強い。③主観的進路実現確率：主観的進路実現確率が高い者は、職業レディネスが高く、教育的な職業に興味が高く、仕事に人間関係、職務挑戦を求める。また、主観的進路実現確率が低い者は、研究的、芸術的な職業に興味が高いことがわかる。

以上の結果をまとめると、先生になろうとする者は自己イメージの男性・女性の両特性、自己の能力評価、職業レディネスが高く、仕事に人間関係を求める傾向が強いことがわかる。また、公務員や民間企業に就職を希望する者は、仕事に労働条件をより強く求めている。また、進路を決めた時期が早い者、そして主観的な進路実現の確率が高い者は、自己イメージの両特性、自己の能力評価、職業レディネスが高く、仕事に人間関係を求めている。

る。将来の進路を入試直前に決めた者は、仕事に労働条件をより求める現実的志向が強い。

以上のように、外的規定要因としての個人的背景が自己概念（自己イメージや自己能力評価）や職業意識（職業レディネスや職業興味や職業志向）に影響を及ぼし、さらに自己概念や職業意識の相違が職業の選択に影響を及ぼしているのが明らかとなった。このことは、若林ら（1983）の提示した外的規定要因を INPUT と考え、それに規定されながら内的 PROCESS としての自己概念・職業意識が形成され、最終的に OUTPUT として進路（職業）選択が行われるという職業社会化過程の一般的モデルの妥当性を示唆するものであるといえよう。しかし、ここでの結果はあくまでも1年生に入学した新入生を対象に、その時点での職業意識や卒業後に就きたい職業について分析したものである。したがって、今後は入学してから実際に職業に就くまでの縦断的データを集めて、それに基づき INPUT - PROCESS - OUTPUT の関係をより詳しく検討する必要がある。

IV. 満足感の規定因について

分析目的

大学生活における満足は、新入生が将来希望する職業につける大学に入学することができたと認知するとき、もっとも高まるものと考えられる。このような一致度の指標として、ここではまず、学部別の職業興味のパターンと各個人の職業興味パターンのズレを求め、このズレが入学大学の満足度の規定因としてどの程度の影響力を有するかを検討する。

結果と考察

1. 職業興味パターンについて

学部別の職業興味得点を示したのが図2である。理科系はすべての学部がほぼ同じパターンを示している。つまり、実際的な職業、指導的な職業で得点が低く、技術的な職業、研究的な職業で得点が高くなっている。文科系は学部によってかなり異なっているが、ほぼ2つのパターンに分かれる。第1は、教育学部と文学部に特徴的で、教育的な職業と芸術的な職業で興味得点が高く、他の職業では得点が低くなっている。もう一つは人文学部、法学部、経済学部の特徴的で、実際的な職業で興味得点が非常に高く、指導的な職業で教育学部と文学部のパターンより得点が高くなっている。これらの結果は、学生の職業興味と学部の教育的環境が適合していることを示している。

次に、学部間で、6種の職業興味得点がどのように異なるかを示したのが表8である。これをもとに、各学部

原 著

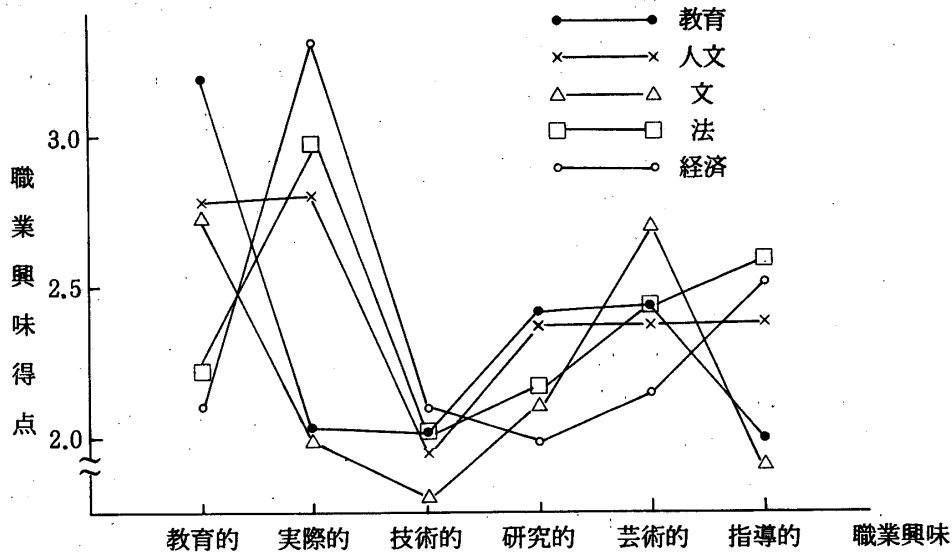


図 2-1 学部別職業興味得点 (文系)
(それぞれ、項目数でわった得点)

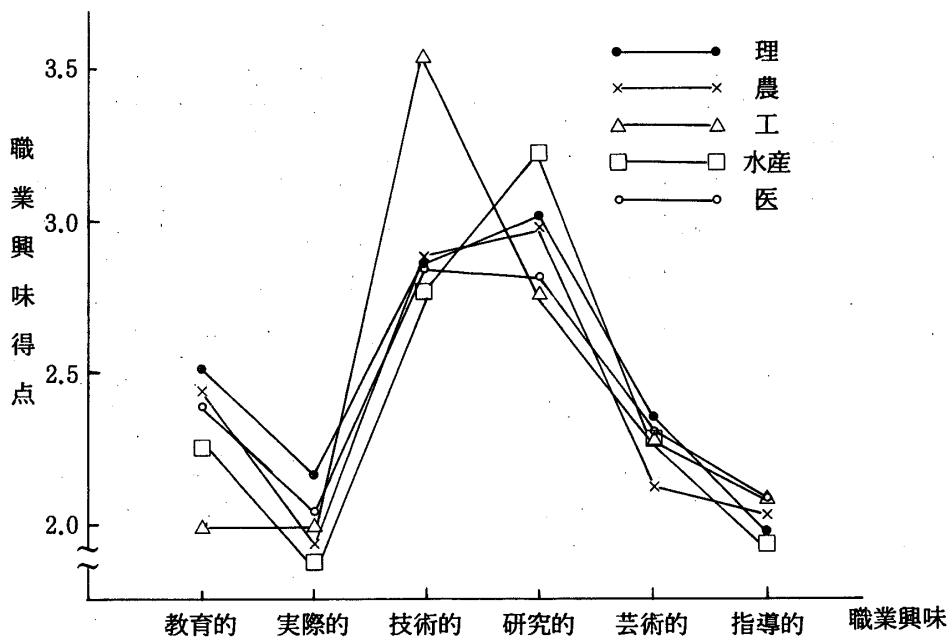


図 2-2 学部別職業興味得点 (理系)
(それぞれ、項目数でわった得点)

の平均的職業興味パターンを出し、学部の職業興味パターンと同じ者（以下、正パターンと略す）と異なる者（以下、脱パターンと略す）に分けた。この際、表 8 で有意差のみられた部分をそのまま基準とせず、正パターン者と脱パターン者が偏らないように表 9 に示すような緩やかな基準を用いた。分類結果は、同じく表 9 に示してある。以下では、正パターン者と脱パターン者の相違について比較検討していく。

(1) 全体での正・脱パターン者の比較

表 10 は、被調査者全体での結果を示している。これを見ると、脱パターン者は、正パターン者と比べると、大学の志望順位、学部の志望順位、共通一次得点、大学の満足度、職業レディネス、自己評価の確実性、が有意に低くなっているのが分かる。このことは、脱パターン者は自分の希望する大学・学部に入ることができず、入学大学に満足していないということを意味している。測上

(1984)によると、大学への進学志望動機として5つ(大学の本来の機能、家族への配慮と規範機能、モラトリアム機能、大学の副次的機能、大学の経済価値機能)あるという。そのうちの「家族への配慮と規範機能」(親孝行のため、親が勧めるから大学に進学するというもの)やモラトリアム機能などを求めて、大学に入学した者は、自分の職業興味パターンと自分の入った学部 averages 職業興味パターンが異質であることを経験する可能性が高いと考えられる。つまり、自分の興味のある事がはっきりしておらず、そのために親の勧めるところ、ないしは休憩の場として、言いかえればただ漫然と卒業後の就職状況の良いところという理由で、大学進学を決定してしまうということではないだろうか。後に詳細に検討するが、学部別にみると、この当時(1983年)一番就職しやすかった工学部で、学部の志望順位に正パターン者と脱パターン者の間で有意差がみられる事実(脱パターン者の志望順位は低い)も上のような状況が存在していたことを裏付けているように思われる。また、脱パ

ターン者の方が卒業後の進路を決めた時期が遅く、イメージギャップ(自己イメージと入学学部のイメージの差の絶対値)が大きく、よりよい労働条件を求めているのが分かる。これらのことも上述の事実を裏付けているのではないだろうか。

表 8-3 職業興味 の 検定

	教育	実際	技術	研究	芸術	指導
教育的		***				***
実際の	***		***	***	***	***
技術的	**	***				***
研究的	***	***	**			***
芸術的			***	***		***
指導的	***		***	***	**	

注) * P<.05, ** P<.01, *** P<.001
上段は経済学部 (N=92), 下段は理学部 (N=102)

表 8-1 職業興味 の 検定

	教育	実際	技術	研究	芸術	指導
教育的		***	***	***	***	***
実際の				***	***	***
技術的	***	***		***	***	*
研究的	***	***	***			***
芸術的	***	*	***			*
指導的	***	***	***			

注) * p<.05, ** p<.01, *** p<.001
上段は教育学部 (N=852), 下段は人文学部 (N=128)

表 8-4 職業興味 の 検定

	教育	実際	技術	研究	芸術	指導
教育的		***	***	***	***	***
実際の			***	***	*	
技術的	***	***			***	***
研究的	***	***	***		***	***
芸術的	***	***	***	***		
指導的	*	***	***	***	***	

注) * p<.05, ** p<.01, *** p<.001
上段は農学部 (N=141), 下段は工学部 (N=410)

表 8-2 職業興味 の 検定

	教育	実際	技術	研究	芸術	指導
教育的		***	***	***		***
実際の	***		*		***	
技術的	*	***		***	***	
研究的		***	*		***	*
芸術的	*	***	***	**		***
指導的	***	***	***	***		

注) * p<.05, ** p<.01, *** p<.001
上段は文学部 (N=51), 下段は法学部 (N=98)

表 8-5 職業興味 の 検定

	教育	実際	技術	研究	芸術	指導
教育的				***		
実際の	**		*	***		
技術的	*	***				*
研究的	**	***			***	***
芸術的			***	***		
指導的	***		***	***		

注) * p<.05, ** p<.01, *** p<.001
上段は水産学部 (N=16), 下段は医学部 (N=59)

表9 職業興味パターンを分ける基準と分類結果

学部	分類基準	分類結果		計
		正パターン	脱パターン	
教育	V1>V2かつV1>V3かつV1>V4かつV1>V5かつV1>V6	455	397	852
人文	V2>V3かつV2>V4かつV2>V5かつV2>V6	47	81	128
文	V1>V2かつV1>V3かつV1>V4かつV1>V6	25	26	51
法	V2>V1かつV1>V3かつV1>V4かつV1>V5	44	54	98
経済	V2>V1かつV2>V3かつV2>V4かつV2>V5かつV2>V6	49	43	92
理	V4>V1かつV4>V2かつV4>V5かつV4>V6	56	46	102
農	V4>V1かつV4>V2かつV4>V5かつV4>V6	81	60	141
工	V3>V1かつV3>V2かつV3>V4かつV3>V5かつV3>V6	282	128	410
水産	V4>V1かつV4>V2かつV4>V5	12	4	16
医	V4>V1かつV4>V2かつV4>V5かつV4>V6	28	31	59
計		1,079	870	1,949

注) V1…教育的, V2…実際の, V3…技術的, V4…研究的, V5…芸術的, V6…指導的

表10 職業興味パターン別にみた尺度の平均値と標準偏差(全体: N=1949)

	正パターン (N=1079)	脱パターン (N=870)	t 値
大学の志望順位	1.43 (0.78)	1.64 (0.96)	-5.23 ***
学部の志望順位	1.18 (0.49)	1.26 (0.64)	-3.09 **
共通一次得点	749.07 (142.25)	734.31 (169.60)	2.05 *
卒業後の進路決定時期	2.87 (1.17)	3.21 (1.24)	-6.24 ***
大学の満足度	4.97 (1.42)	4.59 (1.58)	5.55 ***
職業レディネス(18項目)	53.10 (6.25)	51.09 (6.73)	6.77 ***
自己評価	有能性(8項目) (7.02)	31.08 (7.64)	-1.65
	協調性(5項目) (4.44)	21.94 (4.65)	0.79
	確実性(6項目) (5.04)	25.41 (5.56)	3.38 ***
職業志向	人間関係(14項目) (11.52)	46.73 (10.59)	0.01
	職務挑戦(9項目) (6.74)	28.37 (6.73)	-1.16
	労働条件(5項目) (4.32)	15.67 (4.73)	-2.48 *
ギャップ	M得点(9項目) (6.06)	11.90 (6.60)	-2.95 **
	F得点(10項目) (5.90)	13.20 (6.81)	-4.49 ***

注) *** p<.001, ** p<.01, * p<.05

(2) 学部ごとの正・脱パターン者の比較

学部ごとの結果を示したのが表11である。①教育学部：脱パターン者は、正パターン者に比べ、大学の志望順位、学部の志望順位、大学の満足度、職業レディネス、自己評価の確実性、職業志向の人間関係が低くなっている。また、脱パターン者は卒業後の進路決定時期は遅く、イメージギャップは大きく、仕事に職務挑戦、労働条件をより求めており、正パターン者と異なる職業志向性を持っていることがわかる。②人文学部：脱パターン者は、正パターン者に比べ、自己評価の確実性は低く、仕事に人間関係をより求めている。③文学部：ここでも脱パターン者は、自己評価の協調性、確実性が低く、女性性のイメージギャップが大きくなっていることがわかる。④法学部：脱パターン者は、正パターン者に比べ、共通一次得点、職業レディネス、自己評価の有能性、確実性が低くなっている。⑤経済学部：脱パターン者は、自己評価の有能性が高く、仕事に職務挑戦をより求めている。⑥理学部：正パターン者より脱パターン者の方が、仕事に職務挑戦は求めないが、労働条件はより求めている。⑦農学部：正パターン者に比べ、脱パターン者の方が、大学の志望順位、学部の志望順位が低くなっている。⑧工学部：正パターン者に比べ、脱パターン者は、学部の志望順位、大学の満足度、職業レディネス、自己評価の確実性が低くなっている。また、脱パターン者は、イメージギャップが大きく、仕事に人間関係をより求め、卒業後の進路決定時期は遅くなっていることがわかる。⑨水産学部：何ら有意な差はみられない。ただし、被調査者の数が少ない点を考慮する必要がある。⑩医学部：正パターン者に比べ、脱パターン者は、仕事に職務挑戦を求めている。

以上のように、脱パターン者はそれぞれの学部の一般的職業志向とかなり異なることが分かる。例えば、教育

表11-1 職業興味パターンでみた尺度の平均値と標準偏差（学部別）

	教 育			人 文			
	正パターン (N=455)	脱パターン (N=397)	t 値	正パターン (N=47)	脱パターン (N=81)	t 値	
大学の 志望順位	1.21 (0.54)	1.49 (0.85)	-5.51 ***	2.45 (1.18)	2.81 (1.25)	-1.67	
学部の 志望順位	1.19 (0.51)	1.27 (0.64)	-2.07 *	1.45 (0.88)	1.22 (0.71)	1.49	
共通一次得点	710.06 (157.24)	713.09 (136.61)	-0.30	689.26 (157.67)	639.38 (246.05)	1.40	
卒業後の 進路決定時期	2.37 (1.09)	2.85 (1.23)	-6.03 ***	3.30 (1.08)	3.37 (1.03)	-0.38	
大学の満足度	5.28 (1.33)	4.70 (1.60)	5.69 ***	4.47 (1.56)	4.11 (1.60)	1.24	
職業レディ ネス(18項目)	54.93 (5.88)	52.04 (6.60)	6.72 ***	53.21 (6.19)	51.49 (6.47)	1.50	
自己 評価	有能性 (8項目)	30.75 (6.99)	31.51 (7.73)	-1.49	32.66 (6.73)	32.73 (7.56)	-0.05
	協調性 (5項目)	22.70 (4.19)	22.30 (4.74)	1.28	22.91 (3.60)	22.36 (4.12)	0.77
	確実性 (6項目)	26.29 (4.79)	25.54 (5.73)	2.07 *	28.19 (4.60)	25.78 (5.24)	2.63 **
職業 志向	人間関係 (14項目)	52.63 (10.53)	48.90 (10.06)	5.27 ***	45.02 (10.24)	48.88 (10.25)	-2.05 *
	職務挑戦 (9項目)	25.11 (6.04)	27.41 (6.34)	-5.42 ***	28.01 (5.71)	28.94 (6.57)	-0.81
	労働条件 (5項目)	14.83 (4.32)	15.77 (4.76)	-3.02 **	16.36 (4.31)	15.05 (4.59)	1.59
ギャ ップ	M得点 (9項目)	11.11 (5.83)	12.34 (6.79)	-2.81 **	11.03 (7.88)	10.48 (5.08)	0.43
	F得点 (10項目)	11.59 (5.57)	13.52 (6.84)	-4.47 ***	12.58 (6.48)	13.00 (6.20)	-0.37

注) *** p<.001, ** p<.01, * p<.05

学部に入學しても、脱パターン者は、将来の職業生活において人間関係を求めず、職務挑戦や労働条件をより強く求めている。また、工学部に入學しても、脱パターン者は、職業に人間関係をより求めているのである。高校の進学指導などにおいて学生自身の職業興味パターン（適性）を明らかにし、その学生により適した学部への進学を指導するような配慮が必要であろう。

2. 大学の満足度、および関連諸尺度との関連

(1) 大学ごとの比較

表12は、入學した大学の満足度の平均値と標準偏差、

及び大学の満足度と他の尺度（ここでは大学・学部の志望順位、共通一次得点、イメージギャップをとりあげた）との関係を大学別に示したものである。満足度は、すべての大学でニュートラルポイントを越えており、国立大学の新入生は自分の入學した大学に満足しているのが分かる。また、愛知教育大での満足度がきわだって高いのが分かる。その理由として、愛知教育大は教員養成系の単科大学であり、卒業後の進路を小学校と中学校の頃に既に決めていた者が50%を越えていることから、小さい頃からの目的に確実に一歩近づいたという、入學直後の

表11-2 職業興味パターンでみた尺度の平均値と標準偏差(学部別)

	文 学			法 学			
	正パターン (N=25)	脱パターン (N=26)	t 値	正パターン (N=44)	脱パターン (N=54)	t 値	
大学の 志望順位	1.24 (0.66)	1.38 (0.70)	-0.76	1.52 (0.63)	1.56 (0.84)	-0.21	
学部 志望順位	1.00 (0.00)	1.00 (0.00)	0.00	1.02 (0.15)	1.04 (0.19)	-0.41	
共通一次得点	838.28 (39.50)	814.88 (170.96)	0.68	844.55 (28.21)	772.28 (250.84)	2.10 *	
卒業後の 進路決定時期	3.40 (1.19)	3.31 (1.01)	0.30	3.52 (1.07)	3.56 (1.27)	-0.14	
大学の満足度	4.32 (1.70)	5.04 (1.43)	-1.63	4.73 (1.39)	4.69 (1.45)	-0.15	
職業レディ ネス(18項目)	50.76 (5.18)	48.90 (6.42)	1.14	54.14 (5.12)	49.49 (7.34)	3.68 ***	
自己 評価	有能性 (8項目)	31.16 (10.16)	27.88 (9.27)	1.20	33.39 (8.96)	29.24 (7.61)	2.48 *
	協調性 (5項目)	22.80 (5.41)	19.50 (4.94)	2.28 *	22.11 (5.37)	21.40 (4.89)	0.69
	確実性 (6項目)	26.48 (4.85)	23.77 (4.55)	2.06 *	26.82 (6.43)	24.17 (5.60)	2.18 *
職業 志向	人間関係 (14項目)	44.96 (9.59)	43.31 (10.50)	0.59	45.98 (11.69)	43.22 (9.65)	1.28
	職務挑戦 (9項目)	26.12 (6.11)	27.62 (7.46)	-0.78	29.11 (6.21)	27.08 (6.54)	1.57
	労働条件 (5項目)	12.68 (3.19)	14.35 (5.73)	-1.29	15.45 (3.86)	15.74 (5.27)	-0.31
ギャ ップ	M得点 (9項目)	11.00 (5.64)	12.96 (6.97)	-1.11	11.82 (5.04)	12.15 (6.21)	-0.28
	F得点 (10項目)	11.64 (5.33)	15.81 (6.10)	-2.59 *	14.01 (5.70)	13.56 (8.16)	0.31

注) *** p<.001, ** p<.01, * p<.05

喜びがそのまま表現されているためであると思われる。

次に、大学の満足度と他の尺度との関係を検討する。ここでいうイメージギャップ得点とは、自己イメージと認知された入学学部のイメージとの差の絶対値をとったものである。表12の結果を見ると、満足度と大学の志望順位は、すべての大学で強い正の相関を示している。これは、志望順位の高い大学に入学した学生ほど満足度が高いということを示している。相関関係は弱くなるが、学部の志望順位と満足度との関係もほぼ同様のことが言える。イメージギャップと満足度との関係は、名古屋大

学のみでギャップの大きい学生ほど満足度が低いという結果になっている。名古屋大学は旧帝大の1つで、いわゆる“難関校”の部類に入り、学生がかなり大学自体に期待と希望を持って入学してくると考えられる。それだけに、自分と現実の学生とのギャップが大きいと感ずる場合は、大学に対し不満感(期待が裏切られたという意識)をつのらせるものと考えられる。

(2) 学部ごとの比較

大学の満足度の平均値と標準偏差、及び大学の満足度と他の尺度との関係を学部別に示したのが、表13である。

表11-3 職業興味パターンでみた尺度の平均値と標準偏差(学部別)

		経 済			理 学		
		正パターン (N=49)	脱パターン (N=43)	t 値	正パターン (N=56)	脱パターン (N=46)	t 値
大学の志望順位		1.31 (0.68)	1.40 (0.62)	-0.66	1.54 (0.76)	1.33 (0.52)	1.65
学部の志望順位		1.37 (0.49)	1.35 (0.48)	0.18	1.04 (0.19)	1.00 (0.00)	1.29
共通一次得点		775.12 (165.21)	787.53 (126.84)	-0.40	809.25 (116.83)	823.89 (35.88)	-0.89
卒業後の進路決定時期		3.51 (1.02)	3.60 (1.20)	-0.41	3.02 (1.12)	3.46 (1.15)	-1.95
大学の満足度		5.06 (1.25)	4.47 (1.68)	-1.91	4.91 (1.41)	5.15 (1.12)	0.95
職業レディネス(18項目)		51.35 (5.76)	50.26 (6.81)	0.83	51.50 (6.15)	49.35 (6.47)	1.72
自己評価	有能性(8項目)	28.53 (5.51)	31.05 (6.56)	-2.00*	30.89 (5.97)	30.74 (7.50)	0.12
	協調性(5項目)	22.22 (4.20)	21.30 (4.31)	1.04	20.16 (4.37)	21.41 (3.96)	-1.50
	確実性(6項目)	27.35 (5.92)	26.51 (5.12)	0.72	23.88 (5.38)	25.67 (4.89)	-1.75
職業志向	人間関係(14項目)	39.91 (8.39)	42.35 (10.94)	-1.21	41.46 (9.47)	44.22 (10.71)	-1.38
	職務挑戦(9項目)	25.55 (5.36)	29.09 (7.45)	-2.58*	29.79 (6.56)	27.26 (6.02)	2.01*
	労働条件(5項目)	15.80 (4.20)	16.12 (4.96)	-0.34	12.64 (3.49)	14.87 (3.83)	-3.07**
ギャップ	M得点(9項目)	11.43 (5.73)	11.94 (7.70)	-0.36	10.98 (5.88)	11.25 (6.44)	-0.22
	F得点(10項目)	13.51 (8.10)	12.04 (6.99)	0.92	11.79 (6.48)	10.49 (6.20)	1.06

注) *** p<.001, ** p<.01, * p<.05

満足度得点をみると、ニュートラルポイントは越えているが、人文学部でかなり低くなっているのが分かる。これは、被調査者となった人文学部生の約64%が調査した年度(1983年)にできたばかりの三重大大学の人文学部の所属であり、しかも入学試験が他大学より遅く、他大学の入試に失敗したと思われる者が多数入学してきたためであろうと推察される。

次に、大学の満足度と他の尺度との関係を検討する。文学部と経済学部を除いて、大学の志望順位と満足度は有意な正の相関を示している。なかでも、水産学部で、

$r = .756$ と非常に高い正の相関を示しているのが目につく。

(3) 満足度の規定因

満足度を規定するものを探るために、満足度得点を外的基準とし、個人的背景(性、現在の大学、現在の学部、通学様態、現役か浪人か、大学の志望順位、学部の志望順位、共通一次得点)、職業興味パターン、イメージギャップ、社会経済的背景(父親の学歴、母親の学歴、家庭の階級)に関する諸測定を説明変数として、林の数量化I類によって分析した。その結果を示したのが、表

表11-4 職業興味パターンでみた尺度の平均値と標準偏差(学部別)

		農 学			工 学		
		正パターン (N=81)	脱パターン (N=60)	t 値	正パターン (N=282)	脱パターン (N=128)	t 値
大 学 の	志 望 順 位	1.58 (0.93)	1.90 (0.97)	-1.98 *	1.53 (0.80)	1.55 (0.82)	-0.22
学 部 の	志 望 順 位	1.28 (0.62)	1.75 (1.07)	-3.03 **	1.14 (0.39)	1.28 (0.60)	-2.46 *
共通一次得点		719.25 (135.07)	666.28 (192.86)	1.82	782.71 (105.15)	785.73 (137.39)	-0.22
卒業後の 進路決定時期		3.27 (1.26)	3.65 (1.07)	-1.88	3.21 (1.02)	3.73 (1.15)	-4.62 ***
大学の満足度		4.75 (1.57)	4.32 (1.64)	-1.60	4.72 (1.38)	4.33 (1.59)	-2.54 *
職業レディ ネス(18項目)		50.07 (6.00)	49.48 (6.44)	0.56	51.36 (6.11)	49.39 (6.49)	2.98 **
自 己 評 価	有能性 (8項目)	28.05 (7.29)	29.97 (7.80)	-1.50	30.22 (6.47)	30.39 (7.47)	-0.23
	協調性 (5項目)	21.07 (4.80)	21.30 (4.85)	-0.28	21.74 (4.40)	21.70 (4.67)	0.09
	確実性 (6項目)	24.95 (5.01)	25.15 (6.03)	-0.21	26.27 (4.82)	24.63 (5.60)	2.86 **
職 業 志 向	人間関係 (14項目)	41.72 (10.08)	45.10 (11.61)	-1.85	41.42 (10.03)	43.69 (9.81)	-2.14 *
	職務挑戦 (9項目)	30.01 (7.01)	28.56 (7.65)	1.17	31.57 (6.05)	31.29 (6.61)	0.42
	労働条件 (5項目)	14.96 (4.68)	16.17 (4.74)	-1.50	16.05 (4.35)	15.80 (4.54)	0.53
ギ ャ ッ プ	M得点 (9項目)	11.72 (6.62)	10.40 (6.06)	1.21	10.50 (6.20)	12.51 (6.97)	-2.93 **
	F得点 (10項目)	13.20 (6.81)	11.91 (5.86)	1.18	11.14 (5.53)	13.75 (6.76)	-3.83 ***

注) *** p<.001, ** p<.01, * p<.05

14である。

偏相関係をみると、最も大学の満足度に影響するのは、入学大学の志望順位である。分析の結果から、第一志望と第四志望とでは満足度得点が1.626点も異なることが分かる。次に、大きく影響するのは入学学部の志望順位であり、次に、入学学部そのものとなっているのが分かる。所属する学部の職業興味のパターンと個人の職業興味パターンの相違が、ある程度、大学の満足度を規定するのではないかと予測されたが、分析の結果からは何ら有意な関係は見出されなかった。その最大の理由は、調

査時期が入学直後であったため(4・5月)、職業興味の不一致という点からよりも、大学への入学が志望通りであったか否かが、満足度により大きく影響しているためだと思われる。満足度ではなく、「喜びの体験領域」という概念を用いているが、同じように石郷岡(1961)は「1年生の場合には、入学したこと自体喜びとなっているものが多い。」(p. 149)と指摘している。したがって、もっと時間がたち、職業社会化が進んだ時点で調査を実施すれば、職業興味のパターンの相違が大きく影響してくるのではないかとと思われる。

表11-5 職業興味パターンでみた尺度の平均値と標準偏差(学部別)

	水産			医学			
	正パターン (N=12)	脱パターン (N=4)	t 値	正パターン (N=28)	脱パターン (N=31)	t 値	
大学の志望順位	1.83 (1.19)	1.25 (0.50)	0.93	1.64 (0.91)	1.58 (0.96)	0.25	
学部の志望順位	1.17 (0.39)	1.00 (0.00)	0.84	1.00 (0.00)	1.03 (0.18)	-0.95	
共通一次得点	647.58 (58.97)	510.75 (348.92)	0.78	878.64 (31.18)	861.90 (36.37)	1.89	
卒業後の進路決定時期	3.59 (1.17)	3.50 (1.92)	0.11	2.50 (1.14)	2.81 (1.22)	-0.99	
大学の満足度	5.17 (1.90)	4.75 (0.96)	-0.41	4.93 (1.54)	4.87 (1.50)	-0.15	
職業レディネス(18項目)	50.85 (7.33)	52.75 (6.95)	-0.46	56.89 (6.48)	56.10 (5.61)	0.51	
自己評価	有能性 (8項目)	31.17 (6.63)	31.50 (4.44)	-0.09	31.14 (7.72)	32.81 (6.43)	-0.90
	協調性 (5項目)	21.83 (6.32)	19.75 (2.06)	0.63	21.00 (4.55)	23.45 (4.51)	-0.28
	確実性 (6項目)	25.42 (4.96)	24.75 (3.10)	0.25	27.32 (5.59)	28.29 (4.50)	-0.74
職業志向	人間関係 (14項目)	39.47 (9.03)	46.25 (7.50)	-1.35	50.07 (11.28)	47.81 (12.95)	0.71
	職務挑戦 (9項目)	29.83 (4.35)	33.25 (4.86)	-1.33	33.33 (5.96)	29.48 (6.94)	2.27*
	労働条件 (5項目)	15.17 (2.62)	16.25 (5.06)	-0.57	15.64 (4.04)	15.97 (4.74)	-0.28
ギャップ	M得点 (9項目)	9.57 (6.52)	7.75 (2.63)	0.54	12.39 (5.97)	10.45 (5.48)	1.30
	F得点 (10項目)	12.00 (3.30)	9.25 (5.91)	1.18	13.54 (6.04)	13.19 (7.69)	0.19

注) *** p<.001, ** p<.01, * p<.05

また、職業興味のパターンの相違が何ら満足度に影響を及ぼさなかったということは、現代の青年の特徴の一端をうまく表しているのかもしれない。すなわち、ともかく志望の大学・学部に入れば、満足なのであり、将来の職業のことなど後から考えればよい、ということなのかもしれない。言いかえると、大学入試は将来の自己の職業を確立するための手段ではなく、それ自体が目的となってしまうということであろう。

V. まとめと討論

本研究の結果の概要

1. 各大学・学部の特徴

(1) 外的規定要因と卒業後の進路について

まず、各大学の特徴をあげる。①名古屋大学：現役の者が少なく、第2志望の大学としていた者が多く、大学院に進学しようと思っている者が多く、そして父親が大卒である者が多い。②静岡大学：自宅通学者が少なく、第1志望の学部に入った者が多い。③愛知教育大学：自

表12 大学の満足度との関係（大学別）

		全 体 (N=2020)	名古屋大 (N=839)	静岡大 (N=173)	愛知教育大 (N=370)	岐阜大 (N=370)	三重大 (N=266)
大学の志望順位		.354***	.331***	.472***	.244***	.292***	.431***
学部の志望順位		.185***	.192***	.115	.088	.320***	.091
共通一次得点		.046	.064	.139	.043	.015	.291***
イメージ ギャップ	M得点	-.030	-.089*	-.052	-.051	.073	.010
	F得点	-.068**	-.134***	.005	-.082	.015	-.016
	全 体	-.055*	-.129***	-.027	-.076	.051	-.004
満 足 度 (7段階評定)		4.82 (1.53)	4.85 (1.49)	4.75 (1.69)	5.15 (1.45)	4.72 (1.57)	4.51 (1.55)

注) *** p<.001, ** p<.01, * p<.05
満足度は、項目の平均値と標準偏差である。

表13-1 大学の満足度との関係（学部別）

		教 育 (N=877)	人 文 (N=138)	文 (N=54)	法 (N=103)	経 済 (N=99)
大学の志望順位		.346***	.392***	.130	.480***	.193
学部の志望順位		.200***	.035	……	-.037	.150
共通一次得点		.056	-.170	.099	-.109	.144
イメージ ギャップ	M得点	-.069*	-.208*	-.079	-.079	-.017
	F得点	-.125***	-.008	-.010	-.086	.009
	全 体	-.111***	-.120	-.051	-.095	-.004
満 足 度 (7段階評定)		5.01 (1.49)	4.24 (1.59)	4.69 (1.59)	4.70 (1.42)	4.78 (1.49)

注) *** p<.001, ** p<.01, * p<.05
満足度は、項目の平均値と標準偏差である。
文学部の……は、すべてが第1志望のため計算不能である事を示す。

表13-2 大学の満足度との関係（学部別）

		理 (N=106)	農 (N=147)	工 (N=421)	水 産 (N=16)	医 (N=59)
大学の志望順位		.276**	.381***	.295***	.756***	.485***
学部の志望順位		.113	.413***	.163***	-.101	.255
共通一次得点		.024	.087	.184***	.303	.022
イメージ ギャップ	M得点	-.039	-.001	.080	.388	-.107
	F得点	-.152	-.020	.013	-.022	-.066
	全 体	-.109	-.011	.054	.259	-.099
満 足 度 (7段階評定)		5.02 (1.28)	4.57 (1.61)	4.60 (1.46)	5.06 (1.69)	4.90 (1.51)

注) 表13-1に同じ。

表14 満足度の規定因—数量化I類の結果

要因 item	カテゴリー	例数	category 値	範囲	偏相関係数
性	男	1259	0.030	0.084	0.026
	女	690	-0.054		
現在の大学	A 大	807	0.081	0.306	0.082
	B 大	164	-0.225		
	C 大	363	0.066		
	D 大	362	-0.194		
	E 大	253	0.069		
現在の学部	教育学	852	0.147	0.551	0.112
	人文学	128	0.189		
	文学	51	-0.291		
	法学	98	-0.141		
	経済学	92	-0.109		
	理学	102	0.024		
	農学	141	0.048		
	工学	410	-0.296		
	水産学	16	0.255		
医学	59	-0.047			
通学様態	自宅	1352	-0.024	0.132	0.028
	下宿	479	0.041		
	その他	118	0.108		
現役か浪人か	現役	1472	0.010	1.315	0.053
	一浪	430	0.007		
	二浪以上	43	-0.279		
	その他	4	-1.305		
大学の志望順位	第一志望	1297	0.298	1.626	0.318
	第二志望	396	-0.285		
	第三志望	140	-0.849		
	第四志望以下	116	-1.328		
学部の志望順位	第一志望	1639	0.064	0.947	0.122
	第二志望	234	-0.214		
	第三志望	43	-0.607		
	第四志望以下	33	-0.883		
共通一次得点	平均以上	1334	0.004	0.012	0.004
	平均以下	615	-0.008		
職業興味パターン	同じ	1079	0.096	0.215	0.076
	異なる	870	-0.119		
Image Gap(M)	1σ以内	750	-0.050	0.081	0.028
	1σ外	1199	0.031		
Image Gap(F)	1σ以内	640	0.026	0.039	0.013
	1σ外	1309	-0.013		
父の学歴	大卒	587	0.032	0.046	0.014
	それ以外	1362	-0.014		
母の学歴	大卒	237	0.104	0.118	0.025
	それ以外	1712	-0.014		
家庭のクラス	上流の上	5	-0.290	0.453	0.059
	上流の中	22	-0.072		
	上流の下	37	0.163		
	中流の上	426	0.058		
	中流の中	963	0.029		
	中流の下	369	-0.063		
中流以下	127	-0.255			

注) R = 0.428
記入もれを除いたサンプル数, N = 1949

宅通学者が多く、第1志望の大学であった者が多く、現役の者が多く、教員志望が多く、そして進路決定時期も早い。④岐阜大学：5つの大学の比較では、これといった特徴はない。⑤三重大学：第1志望の大学ではなかった者が多く、公務員になりたい者が多い。

学部ごとにみて、特色のあるのは教育学部と医学部で、ともに卒業後の進路を決めた時期が早いという点で特徴的である。

(2) 内的要因(自己概念と職業意識)について

学部別の特徴をあげる。①教育学部：自己イメージの女性性が高く、自己の能力評価の協調性が高く、職業レディネスが高く、教育的職業に興味が高く、職業に人間関係を求めるが職務挑戦は求めない。②人文学部：自己イメージの女性性が高く、自己の能力評価の有能性、協調性が高い。③文学部：自己イメージの男性性が低く、職業によりよい労働条件を求めない。④法学部：指導的職業に興味が高い。⑤経済学部：自己イメージの女性性が高く、実際の職業、指導的職業に興味が高く、職業に人間関係を求めない。⑥理学部：自己イメージの女性性が低く、自己の能力評価の確実性が低く、職業によりよい労働条件を求めない。⑦農学部：自己イメージの男性性、女性性がともに低く、自己の能力評価の有能性、確実性が低い。⑧工学部：教育的職業に興味が高く、技術的職業に興味が高く、職業に職務挑戦を求める。⑨水産学部：実際の職業に興味が高く、職業に人間関係を求めない。⑩医学部：自己イメージの男性性が高く、自己の能力評価の確実性が高く、職業レディネスが高く、職業に職務挑戦を求める。

2. 外的要因、内的要因、および職業選択の関係について

(1) 自己概念に関して

①自己イメージ：浪人、父親が専門的な職業についている者、自分の家庭が上流に属すると思っている者、将来先生になるつもりのある者、早い時期に進路を決めていた者、主観的進路実現確率が高い者は、自己イメージ

ジの男性性、女性性ともに高い値を示している。また、下宿者と将来自営業につくつもの者は男性性が高い傾向にある。②自己の能力評価：浪人、第1志望の大学に入れなかった者、父親が専門的職業についている者、自分の家庭が上流に属すると思っている者は有能性が高い傾向にある。また、将来教師になるつもの者、早い時期に進路を決めていた者、主観的進路実現確率が高い者は、有能性、協調性、確実性ともに高くなっている。

(2) 職業意識に関して

①職業レディネス：浪人、第1志望の学部に入った者、父親が専門的職業についている者、自分の家庭が上流に属すると思っている者、将来教師になるつもの者、早い時期に進路を決めていた者、主観的進路実現確率が高い者は職業レディネスが高い。②職業興味：学部ごとの特徴は、各学部の教育的環境や就職分野に一致する方向にあった。③職業志向：現役、第1志望の大学に入った者、将来教師になるつもの者、早い時期に進路を決めていた者、主観的進路実現確率が高い者は職業に人間関係を求める。また、下宿者、浪人、第1志望の大学に入れなかった者、自分の家庭は中流に属すると思っている者、主観的進路実現確率が高い者は職業に職務挑戦を求める。また、第1志望の学部に入れなかった者、将来公務員になるつもの者は、職業によりよい労働条件を求める。

3. 満足度の規定因について

大学にもっとも満足しているのは、愛知教育大学の学生である。そして、満足度を規定するものは、職業興味が入った学部と一致するか否かではなく、単に第1志望の大学・学部に入れたか否かである。

以上のように、外的規定因としての個人的背景が自己概念（自己イメージや自己能力評価）や職業意識（職業レディネスや職業興味や職業志向）に影響を及ぼし、さらに自己概念や職業意識が職業の選択に影響を及ぼしているのが明らかとなった。しかし、これら諸要因の相互関係は非常に複雑であり、今後何が決定的な要因となっているかを、より詳しく検討する必要がある。

討 論

本研究では、国立大学新入生が自己概念と職業興味を適合させ、卒業後に、どのような職業につこうとしているのかを、学部ごとに検討した。具体的には、被調査者の専攻や家庭の状況といった外的規定要因が内的規定要因である自己概念（自己イメージと自己能力評価）と職業意識に影響をおよぼし、それらが将来の職業選択に影響を与えると考えて検討した。その結果、もっとも明確

な関係がみられたのは、専門的職業（教師、医師、弁護士など）についている父親をもつ新入生は、自己イメージの男性性、女性性ともに高く、自己の能力として有能性を高く評価し、職業レディネスが高く、教育的職業（小学校、中学校、高校の教師、教育委員、児童心理や青年心理の研究者、教育問題の研究者など）に興味が高く、職業に人間関係を求め、将来は（小・中・高の）先生になるつもりであり、その実現の確率を高いとみている。第2に、大部分の新入生は自分の入学した学部の職業興味パターンに順応的な反応を示していたが、一致しない者（脱パターン者）もかなり見出された。具体的な例をあげてみると、教育学部生の場合、脱パターンの方が、大学の満足度、職業レディネス、自己評価の確実性、職業志向の人間関係が低く、卒業後の進路決定時期は遅く、イメージギャップは大きく、仕事に職務挑戦、労働条件をより求める傾向にあった。つまり、教育学部に入学しても将来の職業に人間関係を求めないのである。逆に、工学部に入学しても脱パターン者は職業に人間関係を求めるという傾向がみられた。このようなことが生じてしまう理由として、本人自身の問題もさることながら、高校までの進学指導に問題があることが考えられる。すなわち、特に共通一次試験がはじまって以来、生徒の特性などを考慮せず、テスト得点（偏差値）によって「この得点ならこの大学だ。」というように、機械的に決めつけてしまうことが脱パターン者の存在に深く関係しているものと考えられる。

以上のように、『外的規定要因→内的規定要因→職業選択』という関係を検討してきたのであるが、ここでの結果はあくまでも1年生に入学した新入生を対象に、その時点での職業意識や卒業後に就きたい職業について分析したものである。したがって、今後は入学してから実際に職業に就くまでの縦断的データを集めて、それに基づき『外的規定要因→内的規定要因→職業選択』の関係をより詳しく検討する必要がある。また、このように縦断的にデータを集めることにより、大学の満足度の規定因が志望の大学・学部に入れたか否かではなく、本人の職業興味パターンと入学学部の平均的職業興味パターンとのズレが大学の満足度に影響を及ぼすということが明らかになるであろう。

文 献

- 淵上克義 1984 進学志望の意志決定過程に関する研究
教育心理学研究, 32, 59-63.
Holland, J. L. 1970 *The self directed search.*

- Palo Alto, Calif : Consulting Psychologists Press.
- Holland, J. L. 1973 *Making vocational choices: A theory of careers*. Englewood cliffs, N. J. : Prentice-Hall.
- 石郷岡泰 1961 大学教養部学生のためのカウンセリングへの社会心理学的接近—序報—年報社会心理学, 2, 132-151.
- 森下高治 1983 職業行動の心理学 ナカニシヤ出版
- NHK世論調査部 1984 中学生・高校生の意識 日本放送出版協会
- 中村雅彦・若林 満・佐野 守 1986 企業魅力のクラスター分析—就職先としての地元企業の魅力—経営行動科学, 1, 1-9.
- 小川一夫・田中宏二 1979 父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 27, 272-281.
- 鹿内啓子・後藤宗理・若林 満 1982 女子大生の社会的・職業的役割意識の形成過程に関する研究 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 29, 101-136.
- 田中宏二・小川一夫 1985 職業選択に及ぼす親の職業的影響—小・中学校教師・大学教師・建築設計士について—教育心理学研究, 33, 173-178.
- 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子 1983 職業レディネスと職業選択の構造—保育系, 看護系, 人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連—名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 30, 63-98.
- 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子 1984 女子大生における職業選択過程の予測的研究 (I)—就職決定群と未決定群の比較をもとに—名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 31, 123-161.
- 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子 1985 女子大生における職業選択過程の予測的研究 (II) 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 32, 287-310.
- 若林 満・中村雅彦・斎藤和志 1986 就職先としての組織の魅力と現代学生の職業志向 経営行動科学, 1, 11-26.

(1986年7月31日 受稿)

ABSTRACT

A STUDY ON CAREER ORIENTATION AMONG FRESHMEN ENROLLED IN THE NATIONAL UNIVERSITIES IN THE TOKAI REGION

Mitsuru WAKABAYASHI, Minoru WADA, Masahiko NAKAMURA, Kazushi SAITO

The present study is aimed at exploring complex relationships between external determinants (personal background) and internal determinants (self-concept, occupational attitudes, etc.) upon occupational choice processes. Self-concept measures included scales for student self-image and self-evaluated competence. Occupational attitudes consisted of occupational readiness, job orientation and occupational interest instrument. In addition, the pattern of occupational interest was individually identified. Then, the differences between a congruent group whose interest pattern is the same as the one of their department to which they belong and a incongruent group whose pattern is different from the one of their department were examined.

Subjects were consisted of 2020 undergraduates (1312 male and 708 female) from five universities: Nagoya University (n = 839), Shizuoka University (n = 173), Aichi University of Education (n = 370), Gifu University (n = 370), and Mie University (n = 266). Items of the questionnaire developed by Wakabayashi et al. (1983) were used except for items on external determinants and an occupational interest. Contents of the questionnaire are as follows.

(1) External determinants, specialization in university, commutation to university, socio-economic status, and parents' educational levels and so on were asked. (2) The student self-image included 23 adjectives each with a 7-point scale. This instrument produced masculinity and femininity (M-F) scales. (3) Self-evaluated competence consisted of 22 ability dimensions considered to be necessary to lead an occupational life. Subjects were asked to evaluate themselves and to give ratings on each dimension by using a 7-point scale. This instrument produced 3

factors labelled as competency, harmoniousness and reliability. (4) Occupational readiness included 30 statements regarding student's readiness for initiating his/her occupational lives. Subjects rated each one by using a 4-point scale. A composite occupational readiness scale was created by combining 18 items selected by a series of item analyses. (5) The job orientation instrument was consisted of 30 items which subjects might want to have as important goals or conditions for their occupations. They were asked to rate each one by using a 5-point scale. This instrument produced 3 factors that were labelled as job challenge, human relations and working conditions respectively. (6) The occupational interest instrument was consisted of 35 occupational titles. Subjects rated each one by using a 5-point scale. This instrument produced 6 factors labelled as educational, practical, technical, investigative, artistic and administrative. (7) Satisfaction with the college life was measured by using a single item based on a 7-point scale. (8) The choice of occupation asked subjects to state occupational titles they wanted to chose after graduating from the college, together with the perceived probability (in percentage) of their actually engaging in those occupations. In addition, (10) the perceived image of the department to which the subject belongs was asked by using the same as those stated in (2) above.

Major findings are summarized as follows. (1) Regarding relationship between external determinants, internal determinants and the occupational choice, the freshmen whose fathers engage in professional jobs have both high M- and high F-scores, evaluate themselves highly competent, have higher levels of occupational readiness, pursue human relations in future occupations, are more willing to become teachers after graduation, and believe firmly that the possibility of becoming teachers is very high. (2) Most of freshmen's patterns of occupational interest are congruent to those of the department in which they enrolled. But some freshmen whose occupational interest patterns are different from those of the entering department tend to show lower satisfaction with the school. It was suggested that this was caused partly by the problems associated with the guidance system of the high school.

The data for this study were collected at one point in time (April to May) when freshmen just enrolled in the universities. Thus it is stressed that longitudinal data covering from entrance to the final occupational choice period need to be accumulated and then relationship between external determinants, internal determinants and occupational choice processes must be examined over the more extended time period.

Appendix 質問紙調査の主要項目

(A) 自己能力評価

〈非常に欠けている～非常にそなわっている〉の7段階
『有能性』

1. ある企画を思いつき、その達成のためにいろいろ情報を集めたり、計画を立案する能力。
2. 人びとの心を動かし、一定の目標に向けてみんなの努力を集中させる能力。説得したり、指導したりして、みんなを引っ張っていく力。
3. 独特な発想に基づき、みんなと違った考え方や方法、独自のアイデアを生み出す能力。
4. いろいろな意見や情報を総合し、何が問題か、これからどうすべきかについて、適格な判断を下せる能力。
5. 自ら進んで自分をためす機会を求めたり、与えられた機会には積極的に挑戦する態度。また、失敗を恐れず、未知の仕事に取り組むこと。
6. いろいろな人と接することを心がけ、広い人間関係を維持していく能力。外交的で社交性に富む態度。
7. 人前で物事を筋道だてて話す能力。また、仲間から孤立したり、仲間との調和を乱したりしないこと。
8. 問題が生じたとき、他の人と折衝したり話し合い、また、必要な時は説得したりお願いしたりして、問題の解決を促進する能力。

『協調性』

1. 相手の気持ちを察し、その人の気持ちになってふるまうことができる能力。どんな人にも親切で心のこもった対応ができる能力。
2. 自分とは違った意見や方法でも拒否せず、それらを十分に検討し良いところは取り入れる能力。
3. いやなことがあっても、落ち込んだり感情的にならなせず、平常心を保って笑顔で対応できる能力。
4. 他の人と協調し、お互いに助け合って仕事をやっていく能力。また、仲間から孤立したり、仲間との調和を乱したりしないこと。
5. 自分の感情を押さえ、相手の気持ちになって考え、その人が何を欲しているかをよく理解する能力。

『確実性』

1. 与えられた課題や、仕事内容を十分に理解し、責任をもってやりとげる能力。
2. 手早く物事をやりとげ、限られた時間内に最大の効率を発揮できる能力。
3. 細かい仕事や、反復作業を長時間こつこつと行う能力。
4. 細かいところまで神経が行きとどき、物事に注意深

いこと。

5. こみいった仕事をキチンと仕上げたり、いわれたことは期日までに確実にやりとげる能力。
6. タイプの違ういろいろな課題をテキパキと処理し、仕事の遅れや、やりっぱなしを作らないこと。

(B) 大学生としての自己イメージ

〈非常にあてはまる～非常にあてはまらない〉の7段階

男性性

1. たくましい
2. 頼もしい
3. 指導力のある
4. 決断力のある
5. 視野の広い
6. 野心のある
7. 強い
8. 意志強固な
9. 自主的

女性性

1. おしゃべりな
2. 細やかな
3. 家庭的
4. 気持ちの細かい
5. おしゃれな
6. 繊細な
7. 優雅な
8. 線の細い
9. 派手な
10. 魅力のある

(C) 職業レディネス

〈非常にあてはまる～まったくあてはまらない〉の4段階

- * 1. 仕事はどちらにしろ苦勞をとまなうものであるから、できれば職業につかないで、自分の好きなことだけやっていたい。
2. 自分のつきたい職業は、前から決っており、現在でもそれに向かって、準備を進めている。
3. 自分の将来は自分で考え、自分で自分にあった職業を探し、自分の力で挑戦して、それを獲得していく。
- * 4. 今は自分の好きなことだけに打ち込み、将来について考えるのは、もう少し後にしたい。
5. いろいろ迷ったが、最近、自分がどのような職業につくべきかよくわかってきた。
6. 自分に何が向いているかわからないし、これといって得意なものもないので、職業を決める場合は、まわりの人の意見に従う。
7. 早く学校を卒業し、仕事をつうじて自分の実力をためしてみたい。
- * 8. 自分のつきたい職業は、限りにくあるが、自分にはどれ1つとして、つけそうには思えない。
9. 自分が興味をもっている職業の内容は、十分知っているの、就職のためにどのような条件が必要であるかは、よくわかっている。
- * 10. 将来の職業のことについては、できるだけ考えないようにしている。

- * 11. みんながいろいろなことを言うので、自分がほんとうに何をやりたいのか、わからなくなっている。
- * 12. 職業選択は、くじ引きのようなもので、ある人がある職業についているのは、偶然の結果である。
- 13. 自分は、職業の上で将来の目標があるので、それを実現させるために、自分でいろいろ考えてやっけていく。
- 14. 自分の選んだ職業をつうじて、自分にどれだけの力があるのか確かめてみることに、大きな関心を持っている。
- * 15. 自分が魅力を感じている職業はたくさんあるが、どれを選ぶにしても、はじめからやりなおす必要がある。
- * 16. どんな職業でもいいから、まず適当なところに就職し、将来のことはその後で、じっくり考えればよい。
- * 17. 自分が将来どうなるか、まったくわからないのだから、自分の適性にあった職業を考えても、意味がない。
- 18. いままでの経験から、自分にどの程度の能力があり、どのような方面に適しているかは、だいたいわかっている。

* は反転項目

(D) 職業興味

<非常興味がある～まったく興味がない>の5段階

『教育的』

1. 幼稚園や小学校の先生
2. 中学校や高等学校の先生
3. 学校・職場・病院などのカウンセラー
4. 病院や施設のケースワーカー
5. 教頭先生や校長先生
6. 教育・福祉専門職の公務員
7. 地域の教育委員や民生委員
8. 児童心理や青年心理の研究者
9. 教育制度や教育問題の研究者
10. 養護学校の先生

『研究的』

1. 霊長類研究者
2. 海洋学者
3. 考古学者
4. 微生物学者
5. 天文学者

『芸術的』

1. 音楽家
2. 著述家
3. 演出家
4. デザイナー
5. 彫刻家

『实际的』

1. 経理士や税理士
2. 経済統計や調査の専門家
3. 司法書士
4. 会計監査や財務の専門家
5. 職業安定所や税務署の調査官

『技術的』

1. 航空機の整備や検査技師
2. 電気や電子工学機器の技術者
3. 機械や自動車などの設計技師
4. 土木や建築関係の技術者
5. 化学工学プラントの技術者

『指導的』

1. 青年実業家
2. 会社の部長や重役
3. 労働組合の書記長や委員会
4. 政治運動や市民運動の指導者
5. 国際会議や競技大会の実行責任者

(E) 職業志向

<普通以下でよい～非常にたくさんあってほしい>の5段階

『人間関係』

1. みんなから、したわれ尊敬されること。
2. 社会的に恵まれない人びとのために、役にたつこと。
3. 人間の可能性や能力について、深く知る機会。
4. 困っている人や、年下の者の相談に応じたり、アドバイスを与えること。
5. 親切で、思いやりのある人間関係を作り上げる機会。
6. 人びとが自己の可能性を十分発揮できるよう、援助したり指導すること。
7. 人びとの間に、お互いに教え・教えられ関係を発展させること。
8. 人間の意識や行動について、研究したり理解を深める機会。
9. みんなから信頼され、頼りにされること。
10. 仕事をつうじ、自分自身が学び成長すること。
11. 人びとの持つ悩みや問題について、研究したり知識を深めること。
12. 他の人々と、表面的ではない、心からのつながりを

持つ機会。

13. 人びとが学び成長するのを、励ましたり、援助すること。

14. 人間の生き方や、人生の目的について考える機会。

『職務挑戦』

1. 仕事の内容が、複雑で変化に富んでいること。

2. 自己の創造力や独創性が、十分発揮できること。

3. 困難な仕事へ挑戦したり、責任のある仕事がまかされる機会。

4. 国際的な交流や、取り引きに関する仕事をする機会。

5. あることについて専門的知識を深め、それを他の人々に伝達すること。

6. 仕事の専門性が高く、誇りを持てること。

7. 最先端の技術や情報に接し、それらを実用化すること。

8. 専門的知識を深め、それを通じて他の人々を援助すること。

9. 何かを発明したり、発見したりするチャンスが持てること。

『労働条件』

1. 高い給与やボーナスをうる機会。

2. 勤め先が安定していて、世間で評判がよいこと。

3. 勤務時間が短く、休日が多いこと。

4. 勤務先への、通勤が便利であること。

5. 職場の環境が快適で、厚生施設が充実していること。